

小神明遺跡群

土地改良事業実施地区埋蔵文化財発掘調査概報

昭和57年度

前橋市教育委員会

目 次

序

凡例

I	遺跡の位置と環境	1
II	発掘調査の概要	2
1	遺構及び遺物	3
2	発掘調査の経過	3
3	縄文時代の住居及びその他の縄文時代遺構	4
4	土師器出土の竪穴住居	24
5	1号墓塚	30
6	土 塚	30
7	環 壕	33
8	井 戸	35
9	溝	36
10	ピット群	36
11	その他の遺構	36
12	ま と め	37

序

近年、農地を効率的に利用するための土地改良事業が、大きな規模で進められています。このような開発事業と埋蔵文化財の保存という問題は、常にうらはらな関係にあり、前橋市教育委員会においても、文化財保護の立場からこの問題に取り組み、両者の調整に努力しております。

前橋市では、既に昭和54年度から、西大室、富田、清里南部各遺跡群の発掘調査が開始され、昭和55年度には、清里南部、56年度には富田の両遺跡群の調査が終了し、西大室遺跡についても、今年度終了しました。これらに代って端気遺跡群と小神明遺跡群の発掘調査が今年度から新たに開始され、ここに報告する小神明遺跡群発掘調査は、昭和57年から昭和59年の3か年度にわたって実施される予定の事業です。

調査の結果、縄文時代の住居及びピット等、奈良、平安時代の竪穴住居、中世以降の環濠、井戸、土壌等、この地域の歴史を解明していくにあたっての資料を加える事ができました。ここにその成果の一端を報告します。

この調査を実施するにあたり、終始御協力いただいた農政土地改良課、小神明土地改良設立準備会の方々、また酷暑の中で直接発掘作業、及び整理作業に携わった調査担当者、作業員の方々に対して厚くお礼申し上げます。

昭和58年3月31日

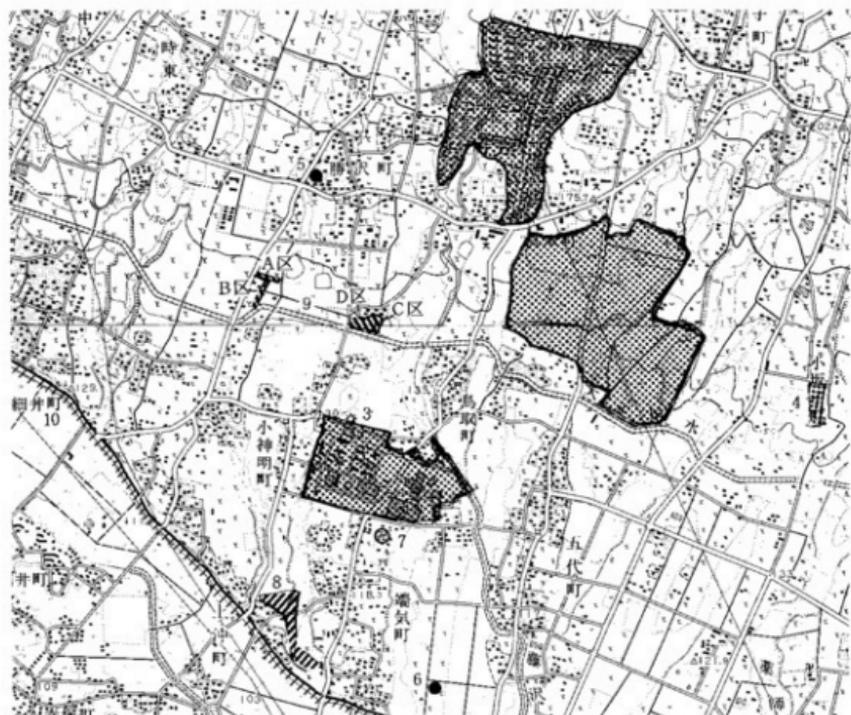
前橋市教育委員会

教育長 金井博之

I 遺跡の位置と環境

赤城山南麓の長く伸びる裾野は、大小の河川の開析により舌状台地が多数形成されているが、その中では、比較的中が広く、谷との比高も2～3mと低い台地上に、小神明遺跡は位置している。なお、本遺跡地は東南東に流れる大正用水北岸沿いの標高140m～143m程の南に向けた傾斜地で前橋市街地を展望できる。古利根川による段崖は、本遺跡地から南西に1.2km程にあり、本遺跡地の西側を通る道路を南に下れば、通称鎌倉坂を通り、段崖下沿いの道路との分岐点に出る。

本遺跡地付近の遺跡環境は、昭和48年から55年の8年間にわたって発掘調査された芳賀北部団地遺跡（現在の高花台団地、昭和48年～50年）、芳賀西部工業団地遺跡（昭和50年）、芳賀東部工業用地遺跡（昭和51年～55年）が、それぞれ北東に約1km、南東に約0.5km、東に約1.5kmにある。面的な広がりを持つ遺跡の調査なので、集落の在り方等を考える上でも貴重な資料となり得るものであり、整理の結果が期待されている。それらの遺跡を概観すれば、生活の痕跡は概に縄文時代前期



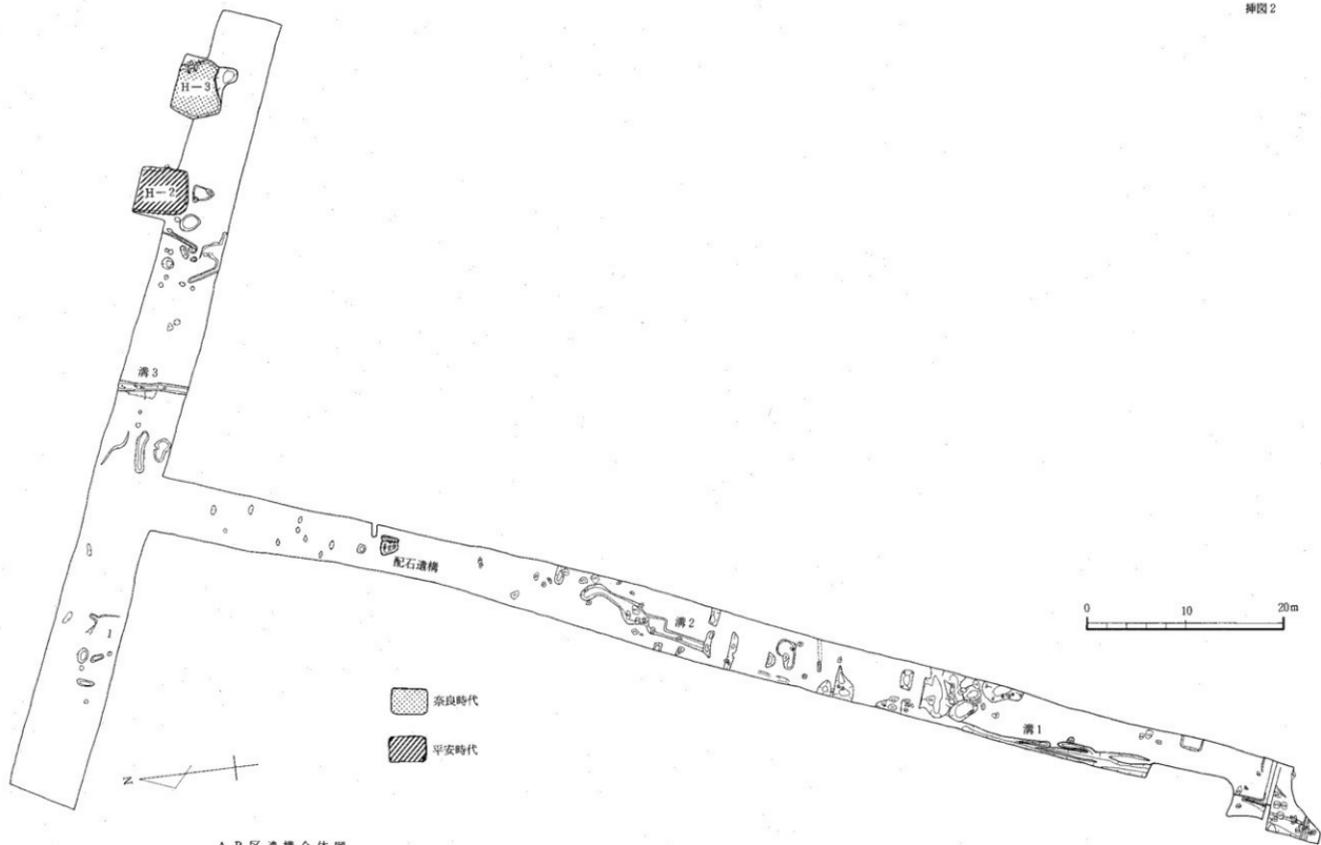
(挿図1の説明) 1. 芳賀北部団地遺跡 2. 芳賀東部工業用地遺跡 3. 芳賀西部工業団地遺跡 4. 松峯遺跡 5. オブ塚古墳 6. 大日塚古墳 7. 善勝寺 8. 竈気遺跡(本年度調査) 9. 小神明遺跡(本年度調査) 10. 旧利根川河川敷

挿図1 周辺の遺跡分布図(1:25,000)

からあり、弥生時代の遺構が未確認なのを除けば、古墳時代から奈良、平安時代を経て、戦国、江戸時代に至るまで、綿々と続いている。個々で見れば、本遺跡地に一番近い芳賀西部工業団地遺跡では、縄文時代前期の堅穴住居、埴輪棺等も検出されたが、古墳31基の集中が見られたところに特色がある。小神明遺跡との関連では近世井戸の検出があげられる。芳賀北部団地遺跡では、奈良、平安の堅穴住居が231軒という多さで検出されたのを始め、縄文時代前、中期の堅穴住居、中期の敷石住居、戦国城跡等が検出されたが、本小神明遺跡とは縄文前中期に比較検討の要素が考えられる。芳賀東部工業用地遺跡では、北部団地と同じく奈良、平安の堅穴住居が420軒、掘立柱建物跡が194軒も検出されたのを始め、縄文時代前期の堅穴住居39軒、後期の敷石住居6軒、城跡1等数多くの遺構が見られた。他に東部工業団地遺跡から、さらに東へ0.5kmの桧峯遺跡(昭和56年)では、古墳時代堅穴住居11軒、奈良、平安時代住居61軒等が検出されたが、特に奈良時代住居跡より出土した奈良三彩小壺は注目を集めた。その他近辺の遺跡としては、昭和10年調査による古墳総覧の芳賀地区に64基(小神明 1基)の古墳が記載されているが、現在ではオブ塚古墳が旧状をとどめ、大日塚古墳がそれと分る程度に残っているだけである。また、仁治4年(1243年)銘の刻まれた鉄製阿弥陀如来坐像(国重文)の安置された善勝寺は、本小神明遺跡の南東約1kmの地点にある。

II 発掘調査の概要

調査面積は6,200㎡。調査地は間に水田部分の低地を挟み距離500m程で東西に分かれている。最初に着手した順に西側をA、B区、東側をC、D区とした。A区は幅5m、長さ80mで東西に、B区は幅4m、長さ103mで南北に走るT字型の遺水路部分であり、桑畑になっていた。重機で耕作土を排除した段階で、A区では2か所に、C・P・F・Pを多量に含む黒色土部分が認められたが遺構としてしっかりしたものは、東端近くに、奈良、平安時代の堅穴住居が各1軒ずつであった。B区では、地山の安山岩を石材として割り出した穴と、溝が2条あった。東側の桑畑と野菜、牧草畑の混じったC、D区は、やゝゆがんだ台形を呈し、東西120m、南北は中央部で50mあり、排水溝がある。この溝を境に東をC区、西をD区とした。表土は比較的浅く、耕作がローム面に届き、かま掘りが目立った。しかし、遺構の密度が高く、調査に手間取った。特にC、D区北辺の幅12m、長さはC・D区境からC区は東へ、D区では西へそれぞれ35m程の範囲では、最高で80cm(C区)少ないところは20cm程(D区)テラス状に高く、その段下に溝状の遺構が見られる。その部分を重機で20cm程排土した段階で縄文土器の散布が著しいので、1辺5mを原則とするメッシュを組み、調査を進めた。その結果、縄文中期から後期にかかる堅穴住居3、ピット3が確認された。そのほか、C区では、東端に縄文中期末と古墳前期の住居、南からC区の3分の2を占めて近世の環濠、またその南西コーナーに平安前期の堅穴住居1、D区では、中央部東西に並ぶように中世以降の土塚12、近世の墓塚1、溝が8条、C、D区合わせて近世の井戸が12、ピット群が4か所あった。

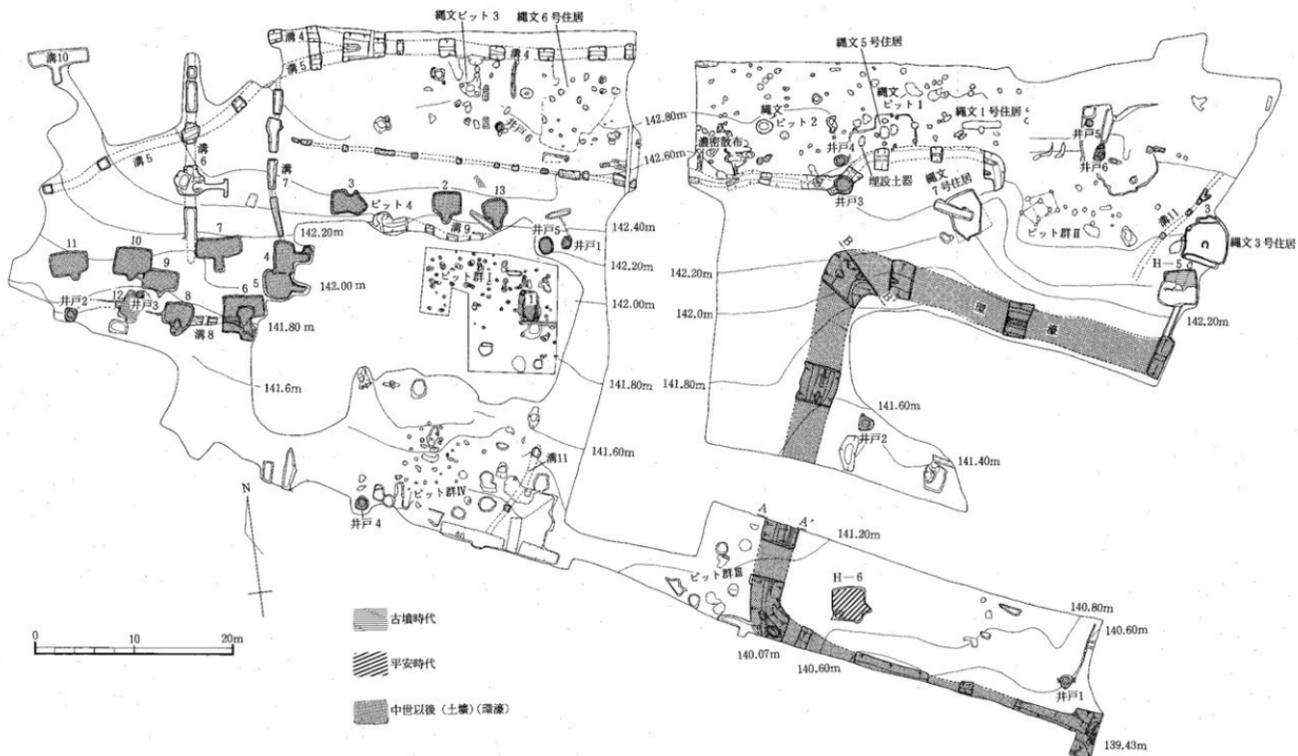


A B 区遺構全体図

D区

C区

神岡3



C D 区遺構全体図

1 遺構及び遺物

イ、遺構数

竪穴住居 9軒

(縄文時代 5軒、古墳時代 1軒、奈良時代 1軒、平安時代 2軒)

環濠 1(近世)

土 墳 13(中世以降のもの12、近世の墓塚1)

溝 12

ピ ッ ト 7(縄文時代4、不明3)

ピット群 4か所(近世民家の柱穴群1か所、中世以降の掘立柱2棟分を含む。)

井 戸 12(近世)

ロ、遺物量

住居にかかわるもの、遺物整理箱 66箱

土 器 (縄文土器破片、土師器、須恵器)

石 器 (石斧、石鏃、凹石、蜂巢石等)

自然遺物

その他の遺構にかかわるもの、遺物整理箱 10箱

(陶磁器破片、磁石、五輪塔火輪)

2 発掘調査の経過

- | | | | |
|--------|------------------------------|--------|--------------------------------|
| 11. 1 | 機械搬入、A・B区抜根 | 12. 21 | 土師6号住居、調査完了 |
| 11. 4 | A・B区表土はぎ開始 | 12. 22 | 土器洗浄開始 |
| 11. 8 | 遺構確認作業開始 | 12. 23 | 縄文1号住居、調査完了 |
| 11. 7 | C区抜根 | 12. 26 | 縄文3号住居確認、排土開始 |
| 11. 9 | 土師2、3号住居確認、排土開始
C区表土はぎ開始 | 1. 5 | 土師2号住居、調査完了
D区土壌確認排土開始 |
| 11. 27 | D区試掘区設定、表土はぎ | 1. 12 | 縄文5号住居遺構確認、排土開始 |
| 11. 29 | 環濠確認、排土開始 | | 土師2、3号住居調査完了 |
| 12. 2 | ピット群I遺構面精査、墓塚1排
土 | | A・B区全体写真完了 |
| 12. 3 | ピット群I、墓塚1調査完了 | 1. 13 | 土壌、調査完了 |
| 12. 7 | C区縄文土器破片散布範囲グリ
ット設定 | 1. 14 | 縄文3、5号住居、調査完了 |
| 12. 14 | 土師5号住居確認、排土開始 | 1. 16 | 縄文6号住居確認、排土開始 |
| 12. 15 | 縄文1号住居確認、排土開始
土師5号住居、調査完了 | 1. 21 | 縄文ピット3遺構確認、排土開始
縄文7号住居確認、排土 |
| 12. 17 | 土師6号住居確認、排土開始 | 1. 22 | 縄文6、7号住居、縄文ピット3
調査完了 |
| 12. 20 | D区北側黒色土範囲グリット設定 | | C・D区、調査完了
C・D区、全体写真 |

3 縄文時代の住居及びその他の縄文時代遺構

C・D区の北側テラス上においては、全体的に縄文土器片及び石片の出土が濃密であったので遺構内部で検出されたものの他に周辺出土の主なものも遺構遺物として取上げた。

(1) 縄文1号住居



本住居跡は、C区北側テラス上
 図版4 東南部に位置し、耕作により攪乱された状態で土器片、石片が濃密に散布していたこと、炉の石組が二辺、しっかりした状態で残っていたことにより住居と断定した。床面と思われるローム質の多いやぶしまった褐色土の面上には、径30cm程の面の平らな石及び石屑が散乱した状態で検出された。壁は東側の一部に6cm前後の段差で検出されたに留まり、住穴と考えられるピットは、判然としなない部分もあるが、床面からはほぼ20cmの深さで炉を中心とし、やぶがんだ円形に回っている。南東部は近代の耕作によるかま掘が大きく入っている。



図版1 縄文1号住居遺構全景



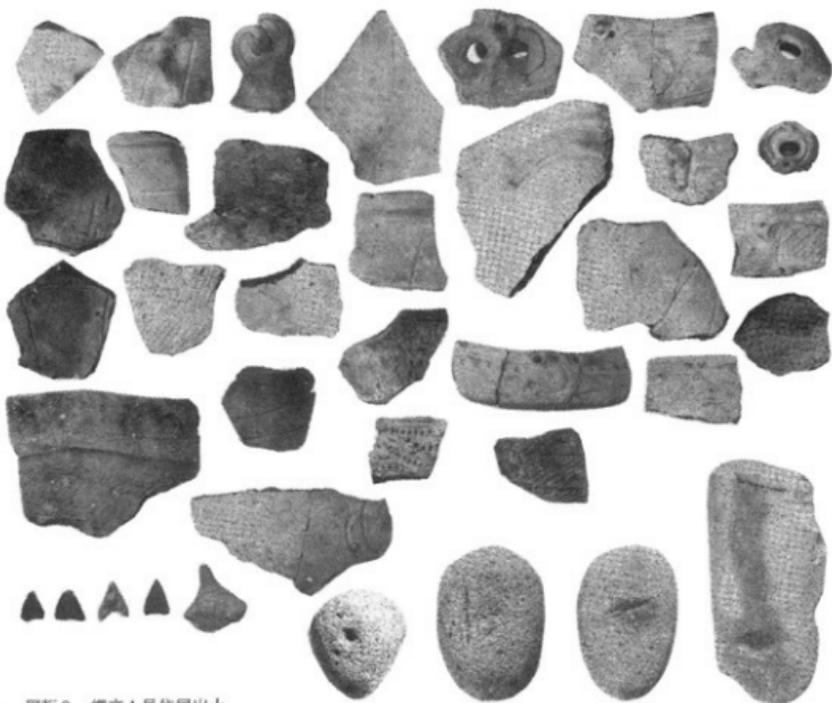
縄文1号住居 炉跡

縄文1号住居出土遺物表

埋蔵番号	器形の徴	形態分類	文様分類	文 様 要 素	色 調	登録番号
1	深鉢、胴	II-B-2	条線	浅黄	J-1 No. 20	
2	深鉢、胴	III-B-2	沈線、列点	にぶい黄褐色	2-C No. 18	
3	深鉢、把手	III-B-2	円形刺突、連結沈線	灰黄褐色	2-C No. 23	
4	深鉢、胴	III-B-2	沈線、列点	にぶい黄褐色	2-C No. 21	
5	深鉢、把手	II-A-2	円形刺突、連結沈線	橙	2-D No. 1	
6	深鉢、口辺	II-A-2	沈線、円形刺突	橙	2-D No. 15	
7	深鉢、把手	II-A-2	2孔並列	浅黄	2-D No. 77	
8	深鉢、口辺	III-B-1	沈線、列点	浅黄	2-D No. 84	
9	深鉢、口辺	II-A-2	微隆起、縄文LR	にぶい黄褐色	2-D No. 3	
10	深鉢、口辺	IV-A-1	沈線	浅黄	2-D No. 98	
11	深鉢、口辺	II-D	沈線、列点	にぶい黄褐色	2-D No. 99	

12	被状口縁 平	鉢	Ⅲ-A-3	沈線、縄文LR	淡黄	色	2-D	No. 66
13		鉢	Ⅱ-C-1	沈線(コンパス文風) 縄文LR	に橙	色	2-D	No. 109
14		鉢	Ⅱ-F	縄文LR	黄	色	2-D	No. 91
15		鉢	Ⅳ-A-2	沈線	黄	色	2-E	No. 15
16		鉢	Ⅳ-F-1	沈線、条線	黄	色	2-E	No. 13
17		鉢	Ⅱ-A-1	微隆起、縄文LR	黄	色	2-E	No. 50
18		鉢	Ⅱ-A-2	微隆起、縄文R	黄	色	2-E	No. 53
19		鉢	Ⅳ-B	沈線、直列凹形刺突、条文LR	黄	色	2-F	No. 60
20		鉢	Ⅳ-C-1	凹形刺突、沈線	黄	色	2-F	No. 50
21		鉢	Ⅱ-C-1	沈線、凹形刺突、刻み	黄	色	2-F	No. 69
22		鉢	Ⅱ-C-1	沈線、縄文LR(羽状)	黄	色	2-F	No. 70
23		鉢	Ⅱ-E	沈線、凹形刺突、縄文LR	黄	色	2-F	No. 75
24	鉢	Ⅳ-C-2	沈線、列点、8字状貼付文	黄	色	2-F	No. 80	
25	鉢	I	異形斜縄文	黄	色	2-F	No. 88	
26	鉢	Ⅲ-B-2	沈線、列点	黄	色	2-F	No. 117	
27	鉢	I	竹管による平行沈線、刻み、粘土瘤	黄	色	2-F	No. 86	
28	鉢	I	縄文0段多条のRLによる菱形文、ループ文	黄	色	2-F	No. 124	

押図番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存度	備考	登録番号
29	石打	岩	5.2	5.0	1.4	25	先端欠		2-D No. 2
30	製石	買安山	13.2	9.2	3.1	320	欠損		C No. 11
31	凹石	硬砂岩	19.1	8.7	4.0	1120	完	凹は1ヶ	J-1 No. 7
32	凹石	安山	11.6	7.9	5.3	750	完	両面使用	J-1 No. 4
33	凹石	安山	11.9	7.4	3.4	480	完	凹は4ヶ	J-1 No. 73
34	凹石	安山	12.5	10.7	8.7	1280	完		2-D No. 4
35	石	鐵	2.3	2.0	0.5	2.3	完		2-F No. 122
36	石	鐵	2.4	2.5	0.5	3.1	完		2-D No. 95
37	石	鐵	3.0	2.0	0.4	2.2	完		2-F No. 121
38	石	鐵	3.0	2.4	0.5	2.45	完		2-D No. 95



図版2 縄文1号住居出土

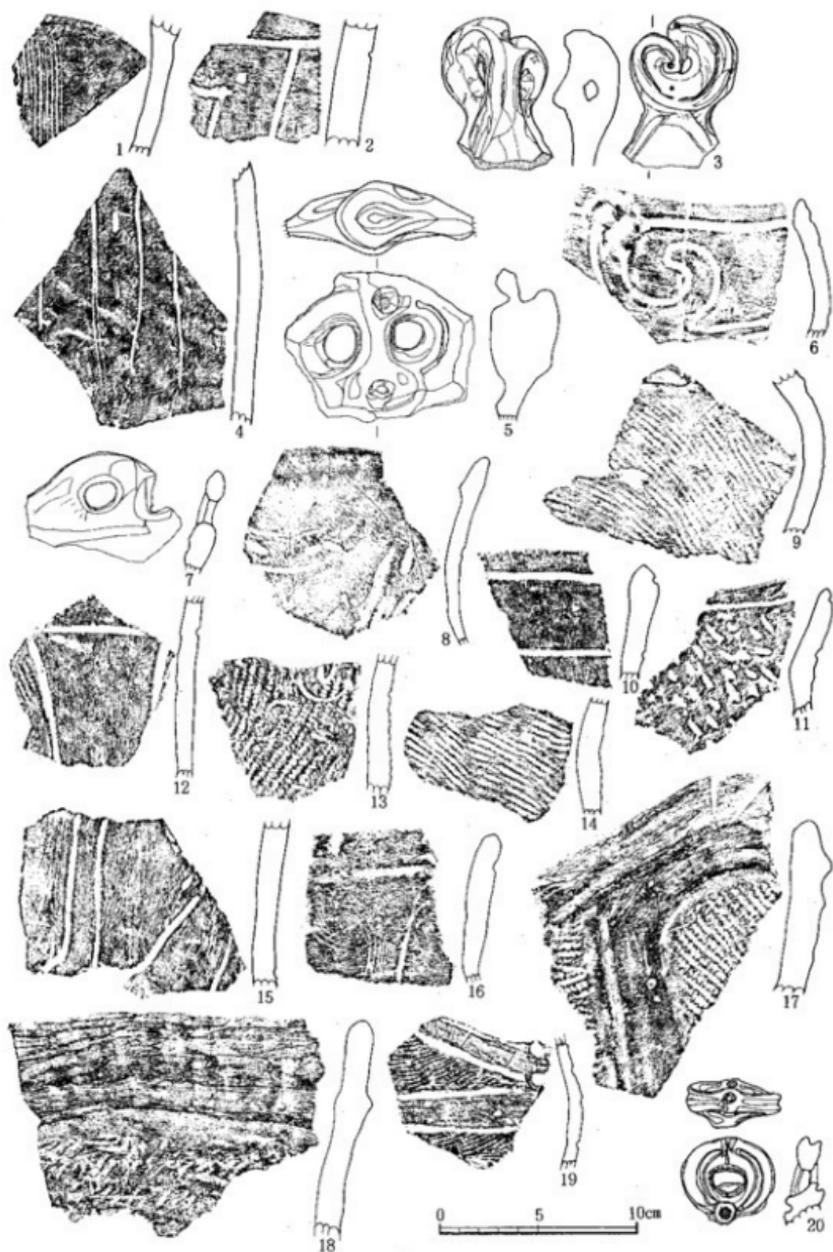


插图5 莒文1号住居出土遗物

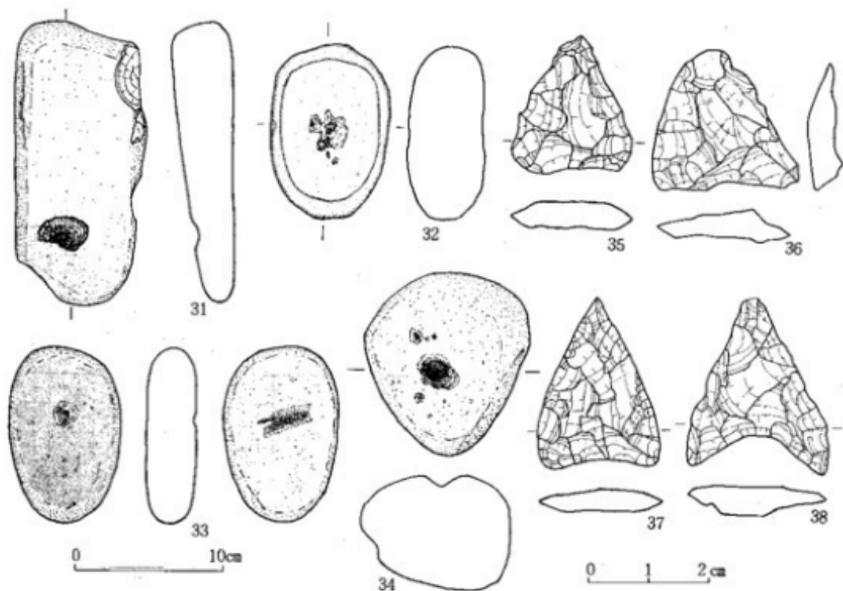
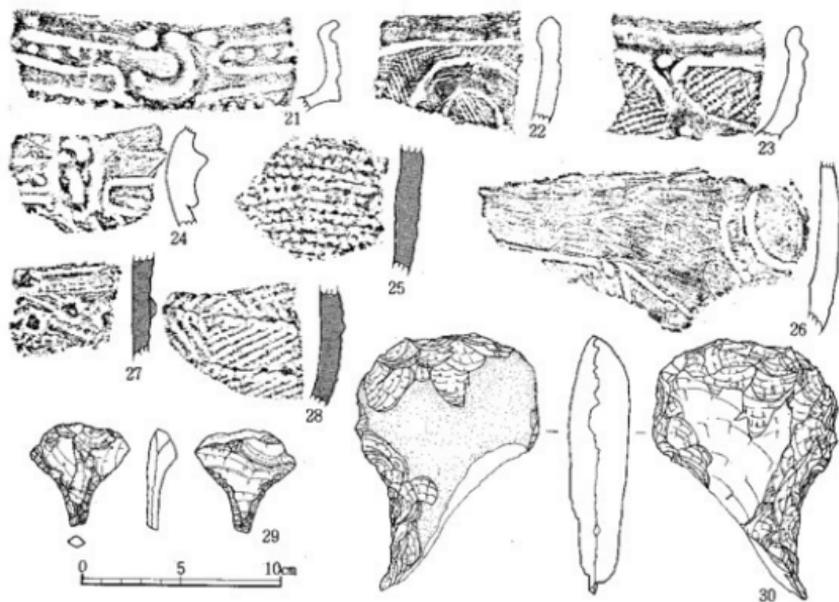


插图6 縄文1号住居出土遺物

(2) 縄文3号住居



挿図7

本遺構は、C区東端北寄りに位置し、南西部及び北部が近年のかま掘りによって切られているが直径がほぼ4.6mの円形プランの竪穴住居で比較的残存状態が良い。耕作土上面から床面まで50cm前後で、遺構を覆う土は、床面近くまでさらさらした耕作土であった。住居の壁は、住居確認面から10cm程の落ち込みで、しっかりしたものではないが、かま掘り部分を除いて全面に検出された。床面は南向きにわずかに傾斜し西側か

ま掘付近以外は、極めて平坦である。床面北東部に、上面の平らな石が敷き並べられたように10石集中し、西側では同様な石が4石散在していた。柱穴は住居の壁を切るように、それと想定されるものが4か所で検出されたが、形状、深さともまちまちである。炉は、安山岩の割れ石各1個ずつで北側と東側が、数個で西側が築かれていたが、南側は固定された石は検出されなかった。炉石の外側で南北70cm、東西55cmの長方形で、長辺がほぼ磁北を向いている。内部は、炉石と同様の安山岩で、こぶしよりやや大ぶりの石10数個と数個の土器片が詰まっていた。なお、炉の南の辺から南へ50cm程離れた位置に鉢型の土器の胴部(挿図9)が下方部を床面から5cm程埋められた状態で検出された。その底部にはさらに1辺が19cm前後の三角形に近い形で6cmの厚みを持ち、下面が非常に平らで、上面がわずかに自然に窪み、さらにその上に小さな凹みが8か所程ある安山岩が設置されていた。



図版3 縄文3号住居遺構全景

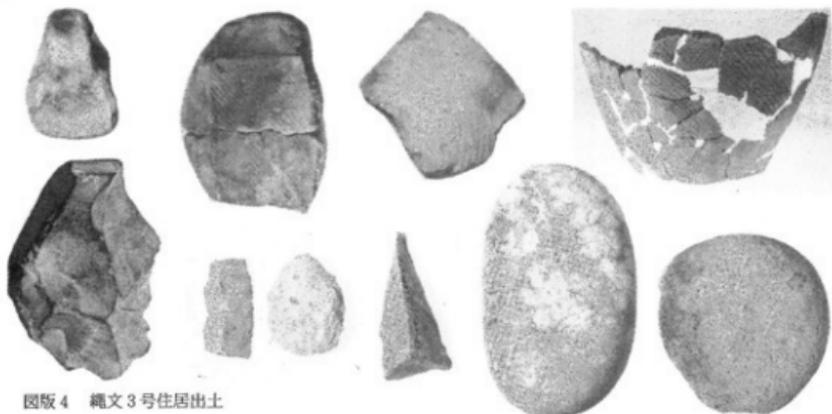


縄文3号住居埋め壁出土状態

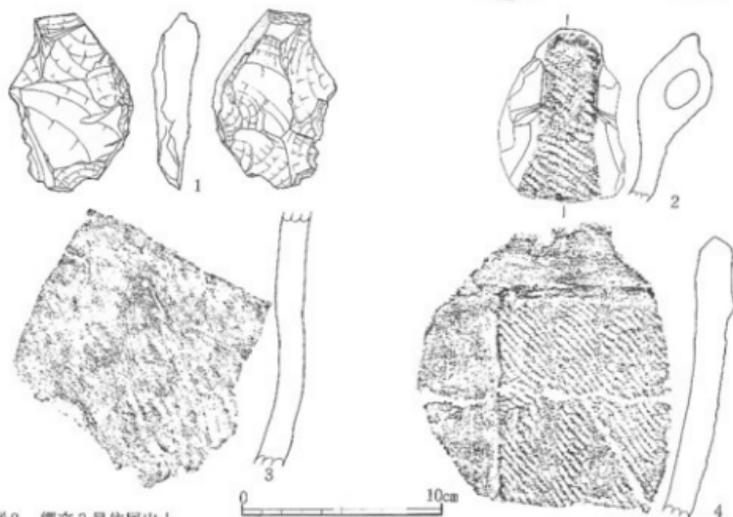
縄文3号住居出土遺物表

押図番号	形態分類	文様分類	文様要素	施文順位	色調	登録番号
2	深鉢、把手	Ⅱ-A	微隆起、縄文LR	縄文→微隆起	にぶい黄褐色	J-3 No. 13
3	深鉢、深鉢	Ⅱ-F	縄文LR		にぶい黄褐色	J-3 No. 14
4	深鉢、口辺	Ⅱ-A-2	微隆起、縄文LR	微隆起→縄文	にぶい黄褐色	J-3 No. 15
10	把手	Ⅱ-F	縄文LR		明黄褐色	J-3 No. 14

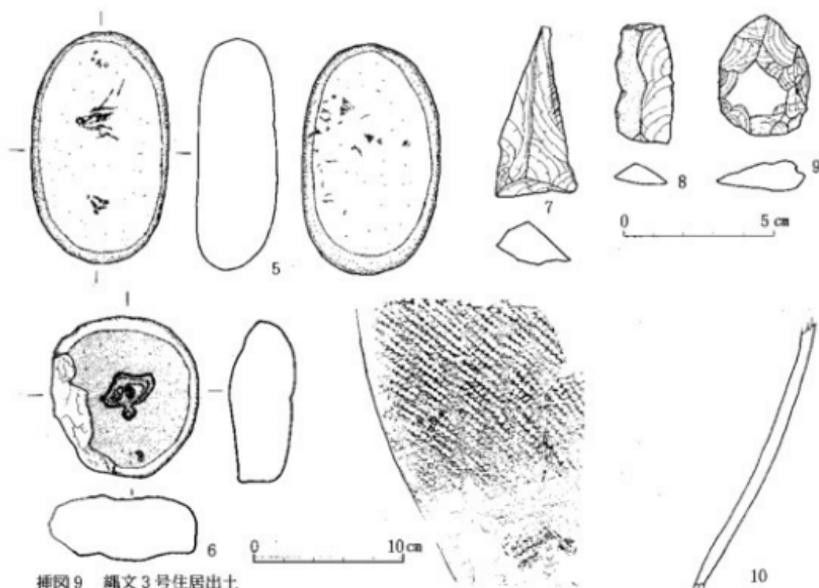
押図番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 要 (g)	残存度	備 考	登録番号
1	スクレイパー	頁岩	9.1	6.2	1.8	130	完形		J-3 No. 2
5	敷	硬砂山	15.2	8.9	5.3	1170	〃		J-3 No. 17
6	凹石、磨	石片	10.9	9.8	4.3	600	〃		J-3 No. 18
7	剥	頁岩	5.9	2.8	1.6	17.5	〃		J-3 No. 68
8	調整痕のある刺針	頁岩	4.0	1.9	0.6	5.5	〃		J-3 No. 2
9	スクレイパー?	頁岩	4.0	3.0	0.9	13.5	〃		J-3 No. 1



図版4 縄文3号住居出土



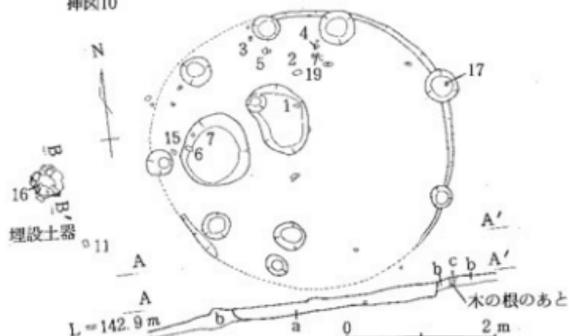
挿図8 縄文3号住居出土



挿図9 縄文3号住居出土

(3) 縄文5号住居

挿図10



- 層 (暗茶褐色ローム)とところどころし状黒色土が混じる。比較的やわらかく粒子は細かい砂質。
- 層 (黄褐色ローム) 堆山、かたくなっている。

本遺構は、C区北側テラス上の中央部や、東寄りに位置し、南側がわずか段下にかかっている。直径3.9 m前後の円形プランの堅穴住居である。住居の壁は、確認面から20cm前後の落ち込みで、住居の北部から東部にかけてと、南西部にわずか検出された。柱穴と考えられるビットは、住居の壁にかかる状態で8か所に認められた。床面からの深さは、最深のもので50cm、大方は20cm前後である。床は比較的平らで特に東半分はしっかりした面が広がっている。西寄りには、柱穴より大きく、深さは柱穴と同程度のビットが2か所あり、内側のビットからは、わずかに焼土が、壁に近いビットからは、住居内出土のものと同時代の土器片が検出された。本遺構の西1.15 mの地点からは、縄文時代後期の深鉢が埋設された状態で検出された。

本遺構は、C区北側テラス上の中央部や、東寄りに位置し、南側がわずか段下にかかっている。直径3.9 m前後の円形プランの堅穴住居である。住居の壁は、確認面から20cm前後の落ち込みで、住居の北部から東部にかけてと、南西部にわずか検出された。柱穴と考えられるビットは、住居の壁にかかる状態で8か所に認められた。床面からの深さは、最深のもので50cm、大方は20cm前後である。床は比較的平らで特に東半分はしっかりした面が広がっている。西寄りには、柱穴より大きく、深さは柱穴と同程度のビットが2か所あり、内側のビットからは、わずかに焼土が、壁に近いビットからは、住居内出土のものと同時代の土器片が検出された。本遺構の西1.15 mの地点からは、縄文時代後期の深鉢が埋設された状態で検出された。

縄文5号住居出土遺物表

番号	図号	形態分類	文様分類	文様要素	色調	胎土	登録番号
1		深鉢	I	羽状縄文 (0段多条RL)	にぶい黄褐色	セシ	J-5 No. 6
2		深鉢	I	ループ文、縄文 (0段多条RL)	にぶい黄褐色	セシ	J-5 No. 8
3		深鉢	I	ループ文、羽状縄文 (0段多条LRとRL)	にぶい黄褐色	セシ	J-5 No. 10
4		浅鉢、把手	III-C-1	円形刺突、連結沈線、沈線	橙黄色	良良	J-5 No. 12
5		深鉢	III-C-1	円形刺突、連結沈線	淡黄褐色	良良	J-5 No. 15
6		深鉢、把手	III-C-1	円形刺突、連結沈線	黄褐色	良良	J-5 No. 24
7		深鉢、銅刺	IV-A-2	沈線、櫛による細かい刺突	淡黄褐色	良良	J-5 No. 25
8		深鉢、銅刺	II-A-3	微隆起、縄文LR	灰黄褐色	良良	2-H No. 8
9		深鉢、銅刺	II-A-3	微隆起	淡黄褐色	良良	2-H No. 11
10		深鉢、銅刺	II-B-2	沈線、列点	黄褐色	良良	2-H No. 13
11		深鉢、銅刺	III-A-3	条線、縄文LR	黄褐色	良良	2-H No. 16
12		深鉢、銅刺	IV-F-2	条線	淡黄褐色	良良	2-H No. 9
13		深鉢、口辺	IV-D-1	沈線	黄褐色	良良	2-H No. 10
14		深鉢、口辺	IV-D-1	沈線	黄褐色	良良	2-H No. 14
15		深鉢、銅刺	I	コンパス文、ループ文、0段多条LR ループ文、コンパス文、平行沈線、0段多条LR	にぶい黄褐色	セシ	2-H No. 24

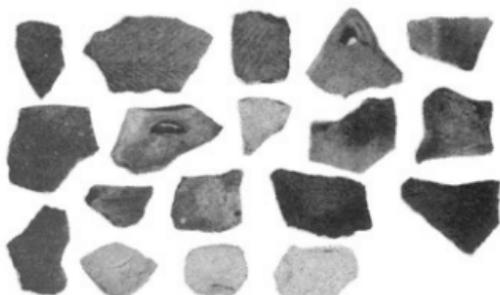
挿図番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存度	登録番号
16	スクレイパー	頁岩	6.5	5.0	2.3	45	完全	2-H No. 27
17	スクレイパー	頁岩	5.4	4.7	1.4	35	完全	J-5 No. 7
18	打製石斧	板岩	(8.0)	(5.4)	1.2	—	現形	2-H No. 4
19	スクレイパー	頁岩	7.2	4.5	1.1	30	完全	J-5 No. 11



挿図11 縄文5号住居出土遺物



図版5 縄文5号住居及び出土遺物



(4) 埋設土器

C区北側段上中央部南端寄りに位置し、縄文5号住居の1.15m西で、同住居の床面より13cm程下がった所に、口縁部を上にして安定した状態で、深鉢が検出された。当初は、完形で1個体であるように見えたが、二重になった内側の土器だけが底部と胴部の下方を欠く形で接合でき、外側の土器は、内側の土器とよく似た破片1個と全く異なる器体の破片数個が使われていた。

1~4(挿図12、14、図版6)

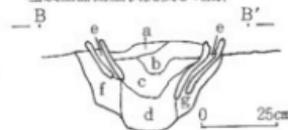
1は口径32cm、推定器高42cm、器厚1.2cm前後とやや厚手のつくり。胴下部のくびれは、口縁部側1/3にあり、口縁は4つで波状に開く。把手は2種4ヶ付され、体部文様と対応する。胴部は微隆起帯が縄文部(LR)に貫入する形で環状文、「J」字状文を構成する。縄文は上部で羽状構成をなし、同一原体を直角に変換する施文で作出をしている。

2は1と共通するが、体部文様が微隆起帯ではなく沈線区画になるなど相違が見られる。色調、胎土、縄文LRと羽状構成は類似する要素。3、4ともに平口縁に沿って隆起帯による無文部を有す深鉢である。3は無節の縄文L、4が縄文RLを使用。4例とも縄文時代後期の初頭の所産。



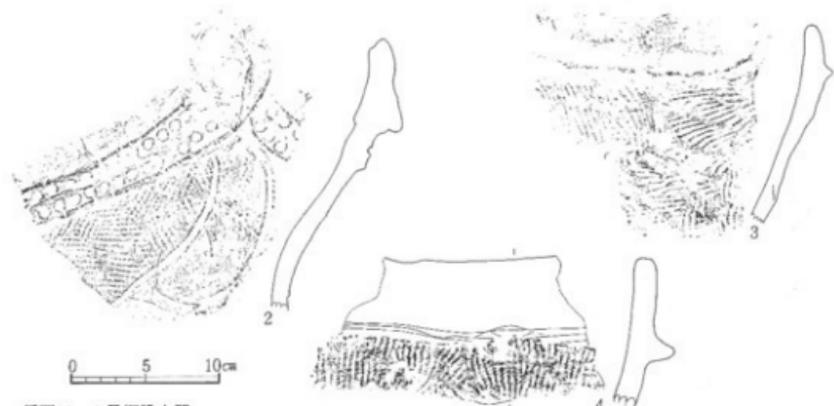
挿図12 埋設土器出土状況及び地断

埋設土器出土状況及び地断



挿図13

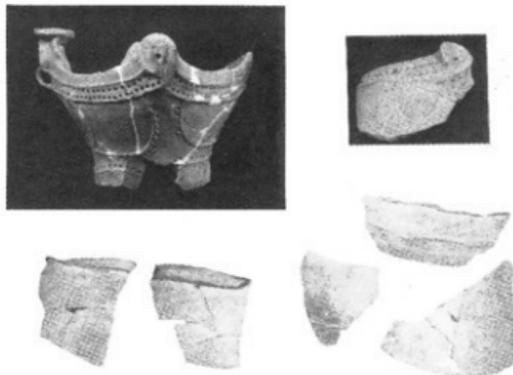
- a層 (暗茶褐色土) 極めて少量のCP、石英粒、YPが混じる。
 b層 (暗茶褐色土) 石英粒、YP、ロームブロックが混じる。
 c層 (暗茶褐色土) 石英粒、ロームブロックが混じる。
 d層 (黄褐色土) ハードロームが全体的にブロック状に流れ込み、その間ほしみに暗茶褐色を呈す。
 e層 (暗茶褐色土) 石英粒を多く含む。
 f層 (黄褐色土) 地山流れ込み、石英粒を多く含む。
 g層 (明茶褐色土) ローム粒を多く含む、粒子は細かく軟らかい。



挿図14 1号埋設土器

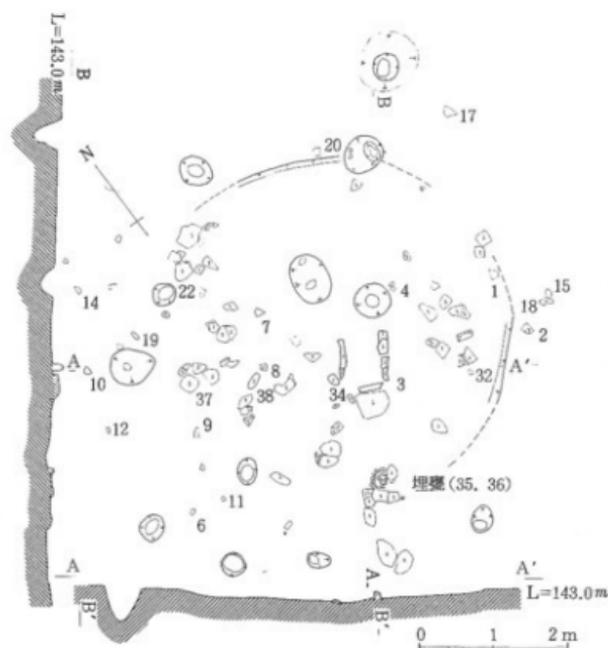


図版6 1号埋設土器



(5) 縄文6号住居

本遺構は、D区北側テラス上の東端に位置し、C区北西部の遺物集中出土地点とは溝を隔てて8m程の距離にある。耕作土を30cm程排除した段階でF Pと若干のローム粒を含むザラザラした感じの土となり、さらに15cm程掘り下げたところ、暗褐色ローム漸移層が落ち込んで皿状になった凹みに、鉄分の多い赤黒い土が不均一に混じり、ほとんど浮石質を含まない褐色土が堆積し、土器片、石片、幼児のこぶし大の石（これは凹みの周辺部に特に多く見られた。）が多く検出されるようになり、住居としての様相がつかめるようになった。しかし壁は判然とせず、北側と東側にわずかな落ち込みが検出されたに過ぎない。全体的な窪み、柱穴から把握できる住居の規模は、直径6m程



押図15 縄文6号住居

の円形を呈し、住居の縁と
考えられる地点から、内部
の最低部（炉石内）までの
高さに20cmの差があり、南
に向けてやや傾斜している。
柱穴と考えられるピットは
8か所に検出できたが確認
面からの深さが45~48cmの
ものと10cm以下のものが交
互になっている。炉は、安
山岩の割り石が使われ長方
形を呈す。長辺の走行は
N-37°-E。北辺は炉石が
なくコの字型。炉の南1.15
mの地点には、深鉢2個体
（胴部のみのものと口縁部
を欠くもの。）が二重に埋
められ、石で囲まれた状態
で検出された。



図版7 縄文6号住居遺構全景



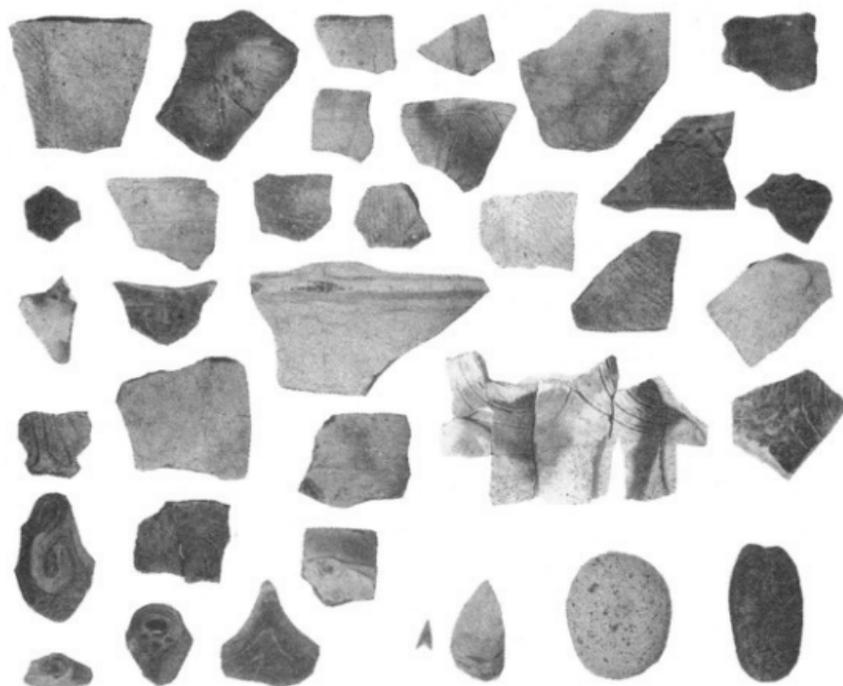
埋め壘出土状況

縄文6号住居出土遺物表

押番	図号	器形の特徴	形態分類	文様分類	文様要素	色調	登録番号
1			深鉢、胴	Ⅱ-A-3	微隆起、縄文L R	淡黄褐色	J-6 No. 2
2			" "	Ⅱ-A-2	" " L	黄色	J-6 No. 6
3			" "	Ⅲ-B-1	沈線、列点	淡黄褐色	J-6 No. 16
4			" "	Ⅲ-A-2	沈線、縄文L R	淡黄褐色	J-6 No. 21
5			" "	Ⅲ-A-3	微隆起、縄文L	黄褐色	J-6 No. 44
6			" "	Ⅲ-A-3	縄文R L、微隆起	淡黄褐色	J-6 No. 64
7			" "	Ⅲ-A-2	縄文L R、沈線	淡黄褐色	J-6 No. 49
8			" "	Ⅱ-B-1	微隆起、条線	淡黄褐色	J-6 No. 46
9			" "	Ⅱ-C-1	沈線、縄文L R	淡黄褐色	J-6 No. 56
10			" "	Ⅲ-B-1	沈線、凹形刺突	明褐色	J-6 No. 90
11			" "	Ⅲ-B-2	沈線、凹形刺突	明褐色	J-6 No. 108
12		鉢、	" "	Ⅳ-E-1	凹形刺突、沈線	明褐色	J-6 No. 88ほか
13		鉢、	" "	" "	凹形刺突、連結沈線	明褐色	3-A No. 1

14	波頂部に突起	深鉢	IV-G	沈線	色	J-6	No. 98
15		深鉢	II-A-3	微隆起	色	B-6	No. 6
16		深鉢	II-B-1	沈線	色	A-6	No. 2
17		鉢	IV-D-1	沈線	色	B-6	No. 7
18		鉢	II-F	網文	色	A-6	No. 26
19		深鉢	II-A-1	沈線	色	B-6	No. 13
20		深鉢	II-A-3	微隆起	色	C-6	No. 20
21		深鉢	II-A-2	微隆起	色	D-6	No. 4
22		深鉢	II-B-2	沈線	色	A-6	No. 表
23		深鉢	IV-F-1	紐文	色	B-6	No. ア
24		深鉢	II-A-3	沈線	色	C-6	No. フ
25		深鉢	II-A-2	沈線	色	C-6	No. 埋
26		深鉢	IV-C-2	沈線	色	C-6	No. 表
27		深鉢	II-A-3	沈線	色	J-6	No. 埋
28		深鉢	III-A-3	沈線	色	J-6	No. 埋
29		深鉢	III-A-3?	沈線	色	J-6	No. 埋
36							

挿入番号	器種	石	材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存度	備考	登録番号
30	凹鉢	石	山	9.9	7.9	4.8	570		端部、側縁を使用	3-C No. 7
31	石	ルン	フェル	11.0	5.6	2.4	260			J-6 表
32	製石	安	山	2.4	1.3	0.4	0.75	完		J-6 No.109
33	打石	石	斧	7.8	5.6	2.8	85	影		3-A No. 5
34	石	磨	石	13.5	7.7	4.4	750	現		J-6 No.296
37	打石	石	果	23.5	21.6	7.7	4600		凹約50ヶ	J-6 No.184
38	打石	石	砂	20.6	8.1	5.0	1410			J-6 No.187



図版 8 縄文 6 号住居出土



押图16 縄文6号住居出土

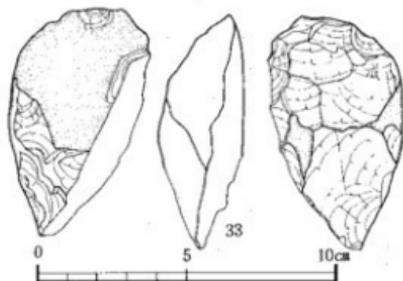
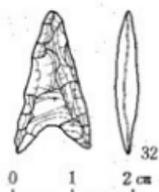
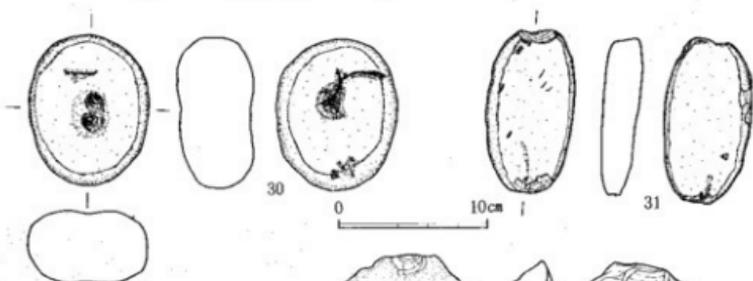
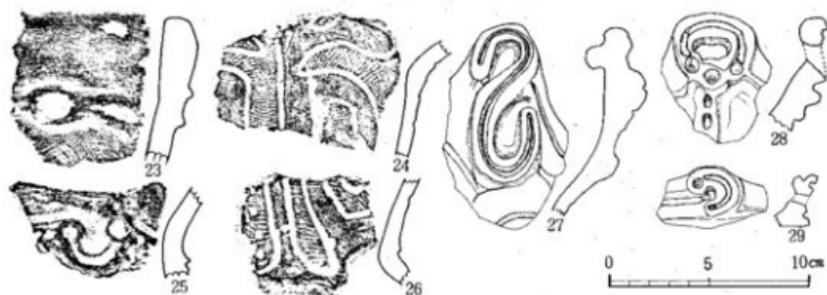
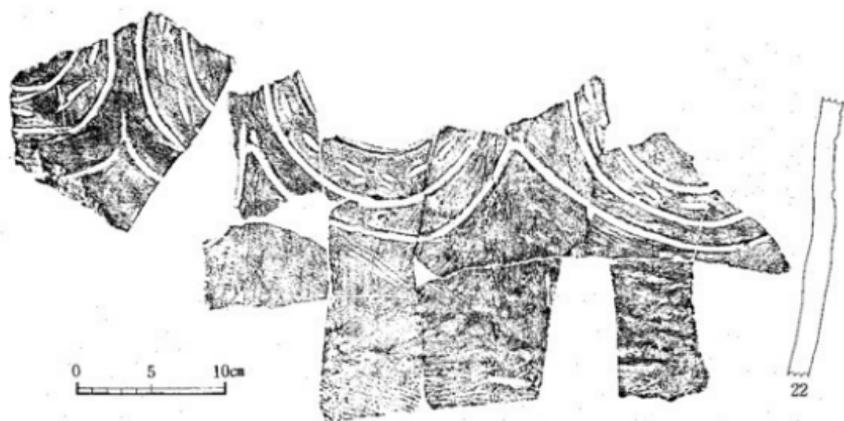
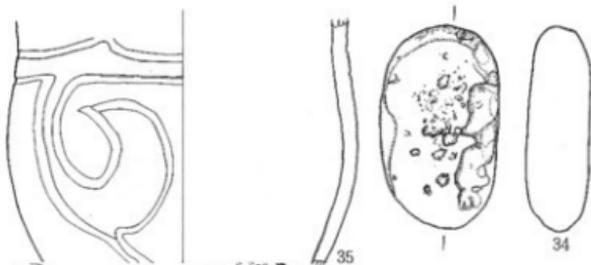


插图17 繩文6号住居出土



图版 8 繩文 6 号住居出土

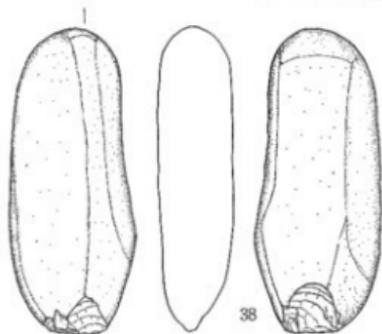


36



10cm

37



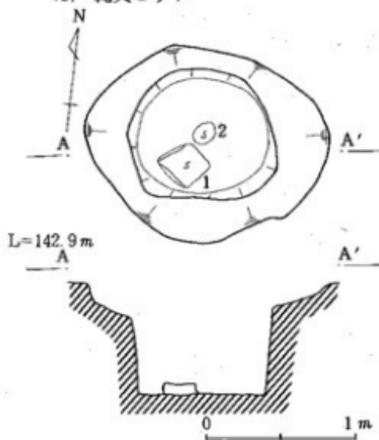
38



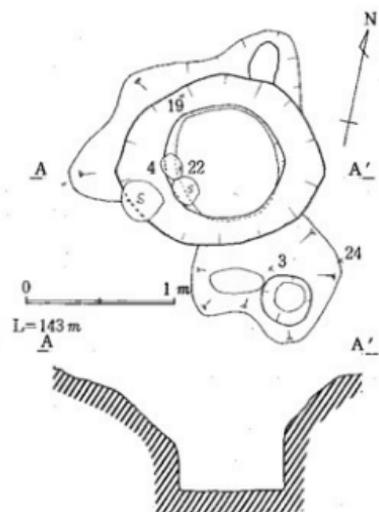
图版 18 繩文 6 号住居出土

图版 9 繩文 6 号住居出土

(6) 縄文ピット



縄文ピット 2



押図19 縄文ピット 3

縄文ピットは4か所で検出された。縄文ピット1はC区北側テラス上中央部北端で、長径が1.76mで走行N-50°-W、短径1mの楕円形を呈し、深さ25~40cmである。出土遺物は、流れ込みと考えられる縄文後期初頭の土器片が十数片検出された。

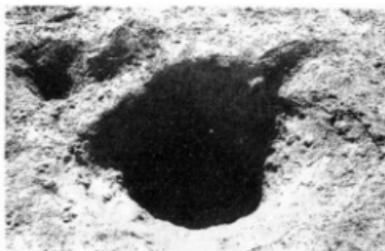
縄文ピット2は、1号同様C区北側テラス上西寄りの中央部に位置し、確認面で長径1.65m走行が東西線とはほぼ一致し、短径1.3mの楕円形を呈し、深さは75cmである。確認面から15cm程の深さまでは、明瞭ではないが、それ以下は極めてしっかりした円筒形の掘り方を呈す。埋土は、確認面付近は炭化物が混じる砂質の灰褐色土であるが、円筒部分は炭化物を若干含む地山より、黒味のあるローム質黄褐色土である。底部にしっかりついた位置に石皿、凹石が検出されたが、土器片は確認面に近い面にほとんどが集中し、すべてこの遺構がある程度埋まってからの流れ込みと考えられる。

縄文ピット3は、D区北端のテラス上中央部にあり、長径1.4m走向N-77°30'-Eの楕円形で、深さは80cmである。確認面から40cm程の深さから底までは、しっかりした円筒形の掘り方を呈す。周辺部はこの遺構に密着してピット状の落ち込みがある。埋土は全体に炭化物粒を含み、上部は鉄分が多く赤味を帯びた褐色土、底近くでは、ローム分が多くなり黄色味のある褐色土で、底部に近づく程よく締まっている。遺物は、蜂巣石と平たい載石及び1個の自然石が縁に沿って流れ込みかけた状態で検出されたほか、十数片の土器片が、流れ込んだ状態で底近くまで検出された。なお本遺構周辺、殊に西南部には、土器片が濃密に検出された。

縄文ピット4は、D区中区部にあり、直径1.5m程のやゝゆがんだ円形を呈す。50~70cmの深さで、埋土は、浮石、ローム粒がわずかに混じる硬く締まった暗褐色土が主体である。遺物は検出されなかった。上部を後世の溝で切られている。



図版10 縄文2号ピット



縄文3号ピット

縄文ピット2出土遺物表

挿図番号	形態分類	文様分類	文様要素	色調	登録番号
3		Ⅳ-A-2	沈線	浅黄	J P ₂ No. 7
4		Ⅱ-A-3	微隆起、縄文L R	橙	J P ₂ No. 6
5		Ⅲ-A-2	沈線、縄文L R	灰黄	J P ₂ No. 復土
6		Ⅲ-A-2	沈線、縄文L R	にぶい黄褐色	J P ₂ No. 復土

挿図番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存度	登録番号
1	石皿	山安山	23.9	28.7	9.1	9000	1/2 現存形	J P ₂ No. 17
2	磨石	岩山	13.0	9.6	7.0	932	完	J P ₂ No. 16

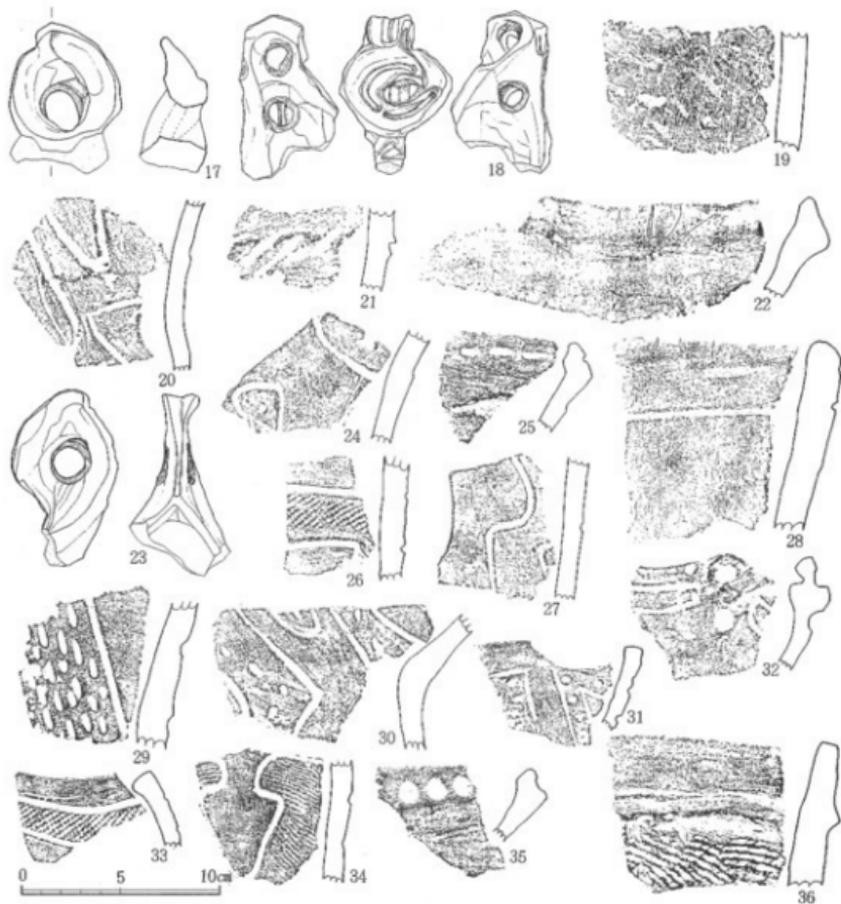
縄文ピット3出土遺物表

挿図番号	形態分類	文様分類	文様要素	色調	登録番号
11	深鉢、口辺	Ⅲ-B-1	沈線	黄褐色	3-I No. 3
15	把手		凹形刺突、連結沈線	黄褐色	3-I No. 30
17	”		凹形刺突、連結沈線	黄褐色	3-I No. 11
18	”		凹形刺突、連結沈線	黄褐色	3-I No. 16
19	”	Ⅳ-F-2	条線	黄褐色	3-I No. 52
20	”	Ⅲ-C-1	沈線	明灰黄	3-I No. 32ほか
21	鉢	Ⅳ-C-2	隆帯、刻目	明灰黄	3-I No. 36
22	”	Ⅳ-G		明灰黄	3-I No. 75
23	”			明灰黄	3-I No. 99
24	深鉢、口	Ⅲ-B-2	沈線、列点	黄褐色	3-I No. 70
25	鉢、把手	Ⅳ-H	列点	黄褐色	3-I No. 108
26	深鉢、口	Ⅲ-A-3	沈線、縄文L R	黄褐色	3-I No. 98
27	深鉢、口	Ⅲ-C-1	沈線	灰黄	3-I No. 111
28	深鉢、口	Ⅳ-A-1	沈線	灰黄	3-I No. 79
29	深鉢、口	Ⅲ-B-2	沈線、列点	黄褐色	3-I No. 122
30	深鉢、口	Ⅲ-B-2	沈線、列点	黄褐色	3-I No. 143
31	深鉢、口	Ⅲ-B-1	沈線、凹形刺突	にぶい黄褐色	3-I No. 表土
32	深鉢、口	Ⅳ-C-1	沈線、凹形刺突	にぶい黄褐色	3-I No. 表土
33	深鉢、口	Ⅲ-A-1	沈線、縄文L R	にぶい黄褐色	3-I No. 表土
34	深鉢、口	Ⅲ-A-3	沈線、縄文L R	にぶい黄褐色	3-I No. 表土
35	深鉢、口	Ⅳ-H	凹形刺突	にぶい黄褐色	3-I No. 表土
36	深鉢、口	Ⅱ-A-2	微隆起、縄文L	明赤	3-I No. 埋

挿図番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存度	登録番号
7	石鉢	黒曜石	2.2	1.5	0.3	0.6	完形	3-I No. 84
8	鉢	山安山	20.3	13.5	14.2	4800	完形	J P ₃ No. 3
9	石磨	山安山	10.0	6.7	5.6	455	完形	3-I No. 266
10	石磨	山安山	9.8	8.5	4.7	480	完形	3-I No. 166
12	調整石	山安山	9.7	4.9	2.2	130	完形	3-I No. 155
13	打石	山安山	8.0	4.1	1.6	40	完形	3-I No. 表
14	打石	山安山	4.7	6.8	4.3	185	完形	3-I No. 168
16	打石	山安山	7.2	4.4	1.3	35	完形	3-I No. 162



神図20 縄文ビット2、ビット3出土

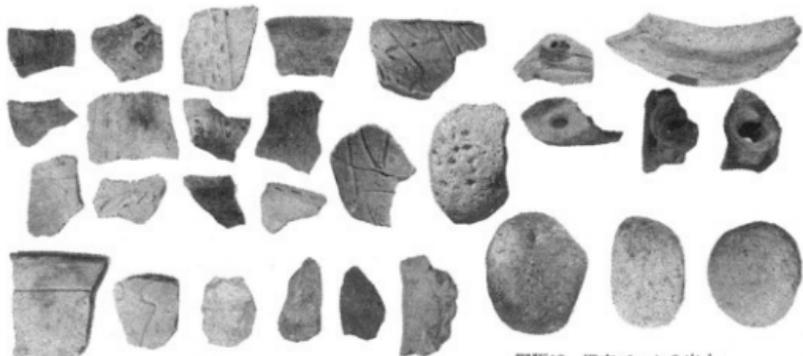


押図21 縄文ビット3出土



図版11

縄文ビット2出土



図版12 縄文ピット3出土

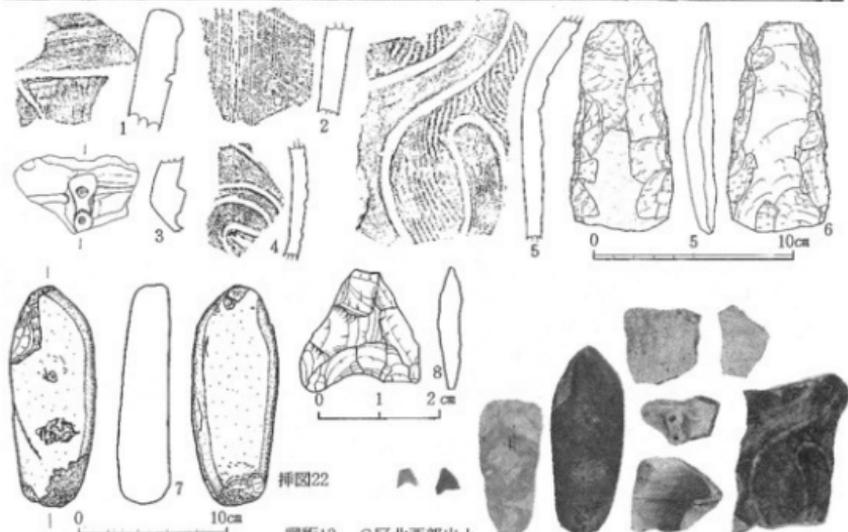
(7) その他の縄文時代の遺物

C・D区共縄文土器、石器が多く出土したが、C区北側テラス上西端は、焼土、柱穴様ピット、礫等が検出されたものの遺構と認め難かった。そこで出土遺物のみ掲載した。

C区北西部出土遺物表

挿図番号	器形の特徴	形態分類	文様分類	文 様 要 素	色 調	登 録 番 号
1		深鉢、口辺	IV-A-1	沈線	褐 灰 色	2-N No 9
2		深鉢、胴	IV-F-2	条線	にぶい 橙色	2-N 埋
3		鉢、胴	IV-C-2	8字状貼付、沈線	にぶい 橙色	2-N 埋
4		鉢、胴	IV-D-2	沈線	にぶい 橙色	2-N 埋
5		深鉢、胴	III-A-3	沈線、縄文RL	灰 黄 褐色	2-N No 50

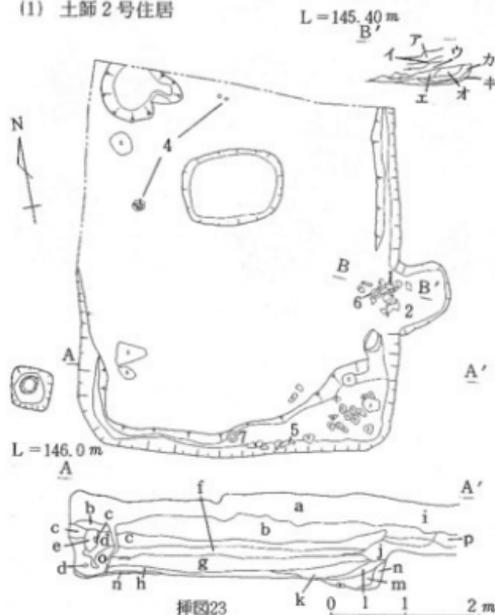
挿図番号	器 種	石 材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残 存 度	登 録 番 号
6	打製石斧	頁 岩	10.7	5.0	1.5	95	完 形	2-N No 3
7	敲石	頁 岩	14.5	5.7	3.6	475	"	2-N No 36
8	石 鏃	安 山 岩	2.2	2.0	3.5	1.3	"	2-N No 2



図版13 C区北西部出土

4 土師器を伴う竪穴住居

(1) 土師2号住居



挿図23

- ア層 (やや青味のある黒色土) CP、焼土ブロック、灰泥じりて粘りがある。
- イ層 (やや灰色をおびた黒色土) CP、焼土粒、ロームブロック、炭化物(径0.5cm)が混じる。
- ウ層 (灰色をおびた黒色土) CP、灰、多量の焼土ブロックとロームブロックが混じる。
- エ層 多量の焼土と炭化物、灰の混じった土。
- オ層 (茶褐色土) 焼土ブロック、ロームブロック、炭化物、黒色灰が混じる。
- カ層 (黄褐色土)
- キ層 (青灰色灰)
- ク層 耕作土。
- ク層 (黒褐色土) FP (少量)、CP、炭化物が混じる。
- C層 (灰色をおびた暗茶褐色土) 焼土粒、灰黄白色粘質土ブロック、炭化物が混じる。
- d層 (灰黄白色粘質土)
- e層 c層とd層の混じる。
- f層 (黒褐色土) CP、FP、ロームブロック、焼土粒が混じる。
- g層 (黒褐色土) CP、FP、ロームブロック、焼土粒 (f層より多量)が混じる。
- h層 (黒褐色土) CP、FP、ロームブロック (f層より多量) 焼土粒が混じる。
- i層 (黒褐色土) CP、焼土粒が混じる。
- j層 (暗茶褐色土) CP、FP (少量) 焼土粒が混じる。
- k層 (灰色味をおびた暗茶褐色土) CP、FP、多量の焼土ブロック、黒色土ブロックが混じる。
- l層 (黒色土) CP、焼土粒、ロームブロックが混じる。
- m層 (灰色味をおびた黒褐色土) CP、焼土粒、ロームブロック、炭化物が混じる。
- n層 (ローム層) 黒色土がブロック状に混じる。
- o層 (黒褐色土) CP、FP、ロームブロックが混じる。
- p層 (暗茶褐色土) CP (多量) FP (径2cm以下) 鉄分凝聚、焼土粒、ロームブロックが混じる。

本遺構はA区東寄りに位置し、発掘区域北側に4分の1程度確認できたので拡張したが北壁に至らず調査を打ち切った。東西4.3m、現状で南北5.4mの長方形を呈す。東壁走向は、N-11°30'-E。周溝は、床面との段差2~6cmで、東壁から南壁を回り西壁の一部で終わっているが、南東コーナーでは幅が広がって三角形の浅い落ち込みを形成している。その落ち込み内には、土器片、石(こぶしよりやゝ大ぶり)が多く検出された。床は全面硬くしっかりし柱穴は検出されなかった。竈は東壁や、南寄りで燃焼部が半分程住居の壁の外側に位置する。土師器壺2個体分、須恵器杯2個体が竈内から出土した。なお、住居中にある2か所の穴は、後世の掘り込みであり、本遺構に直接関係するものではない。



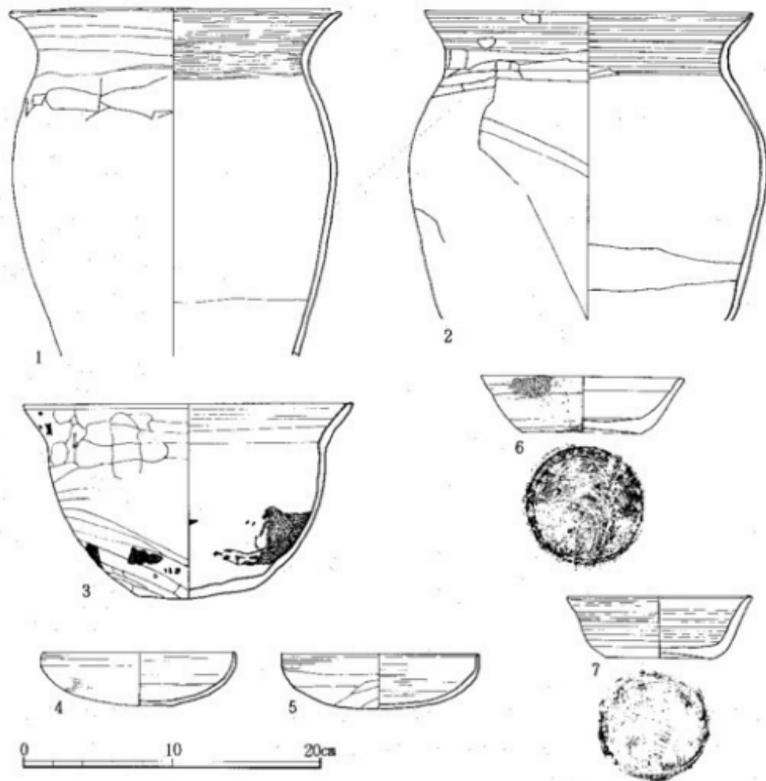
図版14 土師2号住居遺構全景



竈周辺遺物出土状況

○2号住居遺物一覽表

番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考(登録番号)
1	土師器 甕	口径 22.1 残高 23.4	口縁部内外面横ナデ調整。外面に指押さえのあと。胴部横方向、体部から下部にかけて斜め方向のヘラ削り。	良。砂、輝石の微粒を含む。	色調赤褐色。焼成良。60%残。(カマド内1~17、10、14を除く)
2	土師器 甕	口径 21.8 残高 20.8	口縁部内外面横ナデ調整。外面に指押さえのあと。胴部横方向、体部から下部にかけて斜め方向のヘラ削り。	良。砂、輝石の微粒を含む。	色調赤褐色。焼成良。50%残。(カマド内14)
3	土師器 鉢	口径 21.5 器高 13.2 底径 7.4	口縁部内外面横ナデ調整。内面全体ハゲ目。指押さえあと全体に顕著。胴上部横方向に、下部斜め、及び底部にヘラ削り。	良。輝石、長石、雲母の微粒を含む。	色調褐色。二次焼成により黒ずみ、外面にスス付着。(10)内面に堆状の黒色有機質付着。完形。
4	土師器 環	口径 12.8 器高 3.6	口縁部及び内面ナデ調整。外面体部指押さえのあと。底部は不定方向ヘラ削り。	良。輝石、長石、雲母、微粒を含む。	色調赤褐色。焼成良。口縁一部欠。(13、11)
5	土師器 環	口径 13.2 器高 3.7	口縁部及び内面ナデ調整。外面体部一部を残し底部にかけ横方向にヘラ削り。	良。砂粒を含む。	色調赤褐色。焼成良。60%残。(6)
6	須恵器 環	口径 13.6 底径 7.6 器高 3.8	ロクロ成形。回転糸切後周辺部ヘラ調整。	良。ガラス質粒子が多い。	色調灰青色。部分的降灰釉(黒色。)焼成良好。硬い。口縁一部欠。(カマド内10)
7	須恵器 環	口径 12.4 底径 7.2 器高 3.8	ロクロ成形。回転糸切未調整。	良。わずかに砂粒。	色調灰色。焼成良。口縁一部欠。(1)

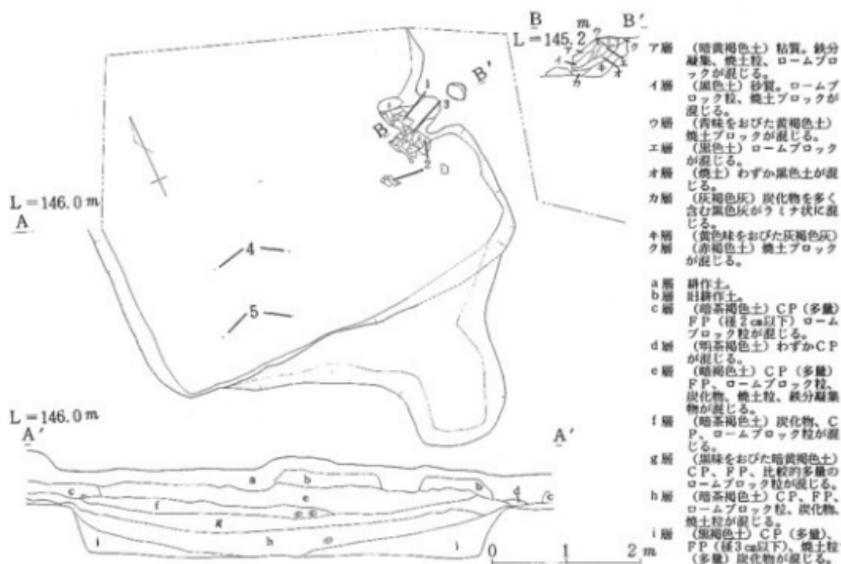


挿図24 土師2号住居出土



図版15 2号住居出土遺物

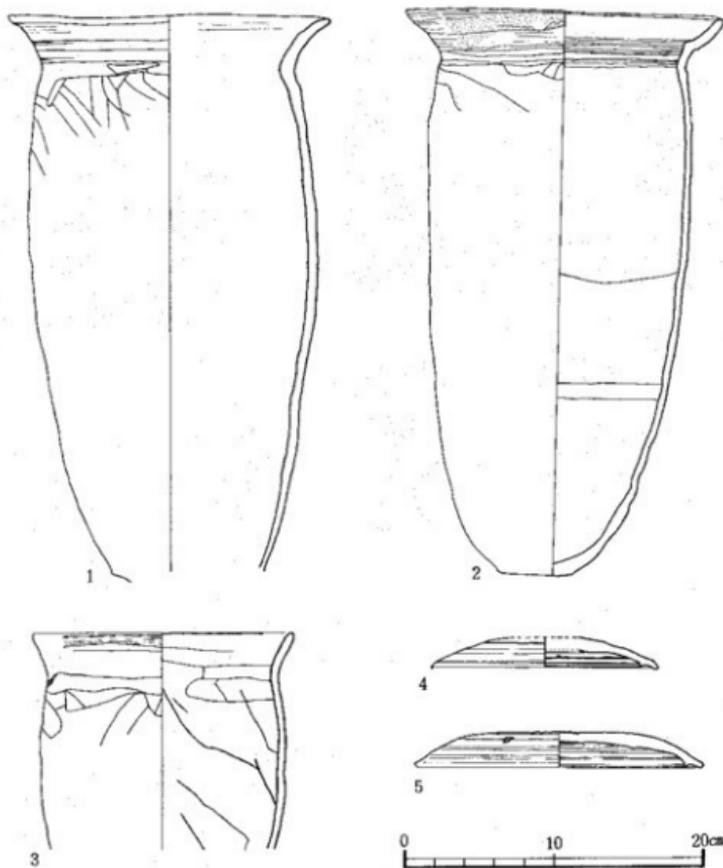
(2) 土師3号住居



挿図25

本遺構は、A区東端から5.4 m西寄りに位置する。住居の南壁の一部が確認できたので拡張したが、地下水の湧出が多く、竈部を含め住居全体のほぼ3分の2を調査して打ち切った。東西5.2 m現状で南北4.6 mなので全体的な形状は把握できなかった。東壁走向はN-5°30'-Wである。周溝、柱穴共にこれも把握できなかった。東西の壁は住居確認面から床面と思われる位置まで55cm前後で

かなりしっかりしている。南壁部分は、外側に走向の異なる住居壁と考えられる落ち込みがあるので、判断としない。竈は、住居の南東コーナーより1.4m北寄りに位置し、煙道部のみ壁外で主体は住居内にある。焚口には石が使われ、2個の長胴甕をその間に架け渡していたと思われる状態である。なおもう一個体の長胴甕は竈にかかっていたものと思われる。



神図26 土師3号住居出土

土師3号住居遺物一覧表

番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考(登録番号)
1	土師器 甕	口径 15.5	口縁部横ナデ。胴部斜方向ヘラ削り。	石英、長石、 砂粒、礫を含 む。	色調茶赤褐色。焼成良好。底部 欠損。 (1)
2	土師器 甕	口径 21 底径 4.7 器高 38.2	口縁部横ナデ。胴、上部横方向、以下 斜方向ヘラ削り。底部ヘラ削り。	輝石、石英、 長石、礫を含 む。	色調明褐色。焼成良好。口縁部 一部欠。 (3、4)

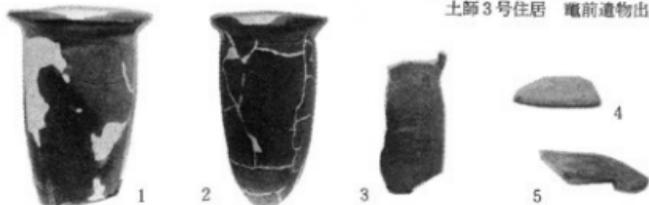
3	土師器 甕	口径 17.4 (推定)	口縁部横ナデ。胴、上部斜方向、以下縦方向へラ削り。	砂粒を含む。	色調明褐色。焼成良好。30%残。(2)
4	須恵器 蓋	口径 19.2 (推定)	ロクロ成形。外面回転へラ削り調整。	礫をわずかに含む。	色調灰褐色。焼成良好。40%残。(24、111)
5	須恵器 蓋	口径 15.2 (推定)	ロクロ成形。長石質が斑点状にかかる。	礫を多く含む。	濃灰色と黄灰色がまだらに混じる。焼成やや不良。(83、38)



土師3号住居 遺構全景

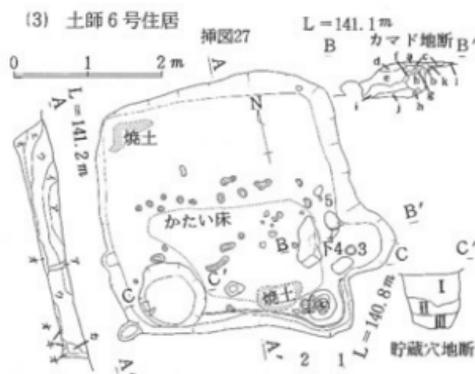


土師3号住居 竈前遺物出土状況



図版16

土師3号住居 出土



- a層 (黒灰色土) さらさらしている。
- b層 (黒色土) 焼土粒が混じる。
- c層 (淡赤褐色土) 焼土ブロック (径5cm) が主体。
- d層 (黒色土) FPが混じる。
- e層 (黒褐色土) FP、焼土ブロック (径5cm~1cm) 焼土粒が混じる。
- f層 (灰褐色土) FP、ローム粒、焼土粒、灰が混じる。
- g層 (黒味をおびた赤褐色土) 焼土ブロック (径5cm~1cm) と黒色土が混じている。
- h層 (赤褐色土) 焼土ブロック、焼土粒が主体。
- i層 (黒色土) 焼土ブロック、焼土粒との混土。
- j層 (黒灰色土) 焼土ブロック (径5cm~2cm) の混じる灰。
- k層 (灰褐色土)
- l層 (ローム層移動)
- 1層 (暗褐色土) FP (わずか)、ロームブロック (径5cm~2cm) ローム粒、ロームブロックが混じる。
- 2層 (黒色土) FP (わずか)、ロームブロック (径2cm) が混じる。
- 3層 (褐色土) ロームブロック、ローム粒が主体。
- 4層 (黒褐色土) FPが混じる。やや砂質。
- 4層 (黒色土) FPが混じる。やや粘質。
- 5層 (黒褐色土) FP、ロームブロック (径5cm~1cm) ローム粒が混じる。
- エ層 (暗褐色土) FP (少量) ロームブロック (径5cm~1cm) ローム粒が混じる。
- オ層 (暗褐色土) ロームブロック (径1cm~2cm) と黒色土が混じりエ層より褐色味が強い。
- カ層 (黒褐色土) ローム粒、ロームブロック (径5cm~2cm) と黒色土の混じり。FPが混じる。
- キ層 (こげ茶色土) 焼土粒、灰色粘土が混じり、密。

本遺構はC区南側、環濠内南西角に位置する。東西3.4m、南北3.4mで南東コーナーがやゝ突出しているがほぼ正方形を呈す。東壁走向はN-2°30'-E。周溝は南壁下のみに見られる。柱穴は、南西コーナーと西壁にいずれも住居壁にかかり住居の床より高い位置に2か所検出された。また床を南北に仕切る様に、直径10cm前後の小穴が並び竈前を含め床の南半分が硬くしまっている。

竈は東壁南寄りに位置し、焚口の石が住居の壁とほぼ並んでいる。竈前の大きな自然石は、焚口に渡されていたものが転落したものであると思われる。袖部は、ロームと若干の白色粘土が用いられている。貯蔵穴は2か所にあり、竈側のものは浅く甕がやゝ斜めに埋め込まれていた。南西コーナーのものは、床面から底まで74cmの深さを持つしっかりした円筒形を呈している。

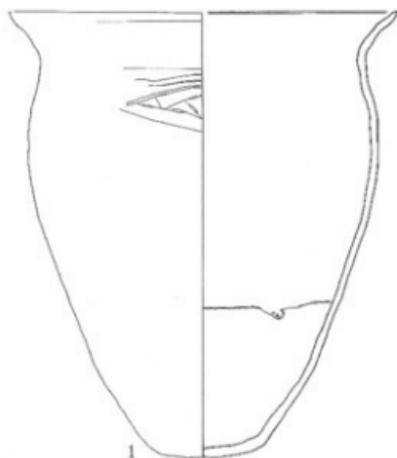


図版17 6号住居遺構全景

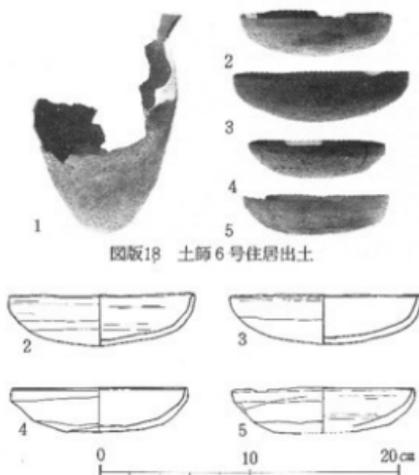


竈前遺物出土状況

番号	器種	法量(cm)	技 法	等 等	胎 土	備 考(登録番号)
1	土師器 甕 (推定)	口径 26 器高 30.2	口縁部内外面横ナデ調整。肩部は横方向、体部から下部は斜、縦方向へラ削り。底部へラ削り。	肩部は横方向、体部から下部は斜、縦方向へラ削り。底部へラ削り。	長石、黒雲母を含む。	色調赤褐色、外面下半分、二次焼成により黒褐色。焼成良。50%残(1)
2	土師器 杯	口径 12.4 器高 3.4	口縁上部及び内面横ナデ調整。底部不定方向にへラ調整。	口縁上部及び内面横ナデ調整。底部不定方向にへラ調整。	長石、黒雲母わずかに含む。	色調暗褐色、焼成良。口縁わずかに欠。(2)
3	土師器 杯	口径 12.5 器高 3.3	口縁上部及び内面横ナデ調整。底部不定方向にへラ調整。	口縁上部及び内面横ナデ調整。底部不定方向にへラ調整。	長石、黒雲母、石英を含む。	色調赤褐色。焼成良。口縁わずかに欠。(3)
4	土師器 杯	口径 11.8 器高 3	口縁上部及び内面横ナデ調整。体部横方向にへラ削り。底部は不定方向にへラ調整。	口縁上部及び内面横ナデ調整。体部横方向にへラ削り。底部は不定方向にへラ調整。	雲母、石英、碑を含む。	色調赤褐色。焼成良。口縁わずかに欠。(7)
5	土師器 杯	口径 12.2 器高 3	口縁上部横ナデ、内面水ぶき。体部横方向に底部は不定方向にへラ調整。	口縁上部横ナデ、内面水ぶき。体部横方向に底部は不定方向にへラ調整。	輝石、砂粒、小石を含む。	色調褐色。底部二次焼成により青黒色。焼成良。70%残(5)

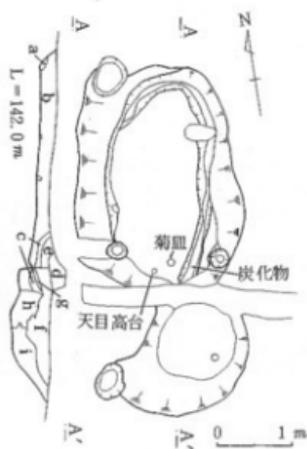


挿図28



図版18 土師6号住居出土

5 1号墓墳

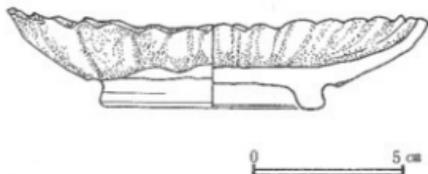


一神図29

- a層 (黄褐色土層) やわらかいロームに黒色土がブロック状に混じる。
- b層 (黒色土層) わずかにローム粒がまじりしっており。
- c層 (黒色土層) ロームブロック (径2cm~5cm) が混じる。
- d層 (黒褐色土層) ロームブロックが混じる。
- e層 (黒褐色土層) FP (わずかに) 混じる。
- f層 (黄褐色土層) ロームと褐色土の不均一な混じり。やわらかい。
- g層 (黒褐色土層)
- h層 (黒色土層) ロームブロック (わずかに) が混じる。
- i層 (黄褐色土層) ロームブロック (径3cm~7cm) が混じる。

D区中央部のC区寄りピット群Iの東端に、遺構確認面で長軸3m、短軸1.8mの楕円形ピットが検出された。長軸がほぼ南北に向き、深さは30cm。それぞれ2.7m、1.3mの底部は平面を呈し北側から東側にかけて周溝、東西側南寄り落ち込み斜面に対状に2この柱穴が見られる。底面近くから菊皿、天目の高台部及び炭化物が出土した。なお、本遺構と近世のかま掘りを挟んで南側に接する円形ピットは別の遺構と考えられる。菊皿は次の様相を呈す。

器形	法量 (cm)	技法	胎土	備考
菊皿	□ 径 13.9 器高 3.05 高台径 7.25	付高台と思われる。高台部内側回転ナデ。口唇部へう花弁状を呈す。	よく精製された陶土わずかに礫を含む。	色調素地は淡黄色。軸は淡い淡緑色。溝部はやや褐色がかつた緑でよどみに白濁。焼成は酸化。70%残。

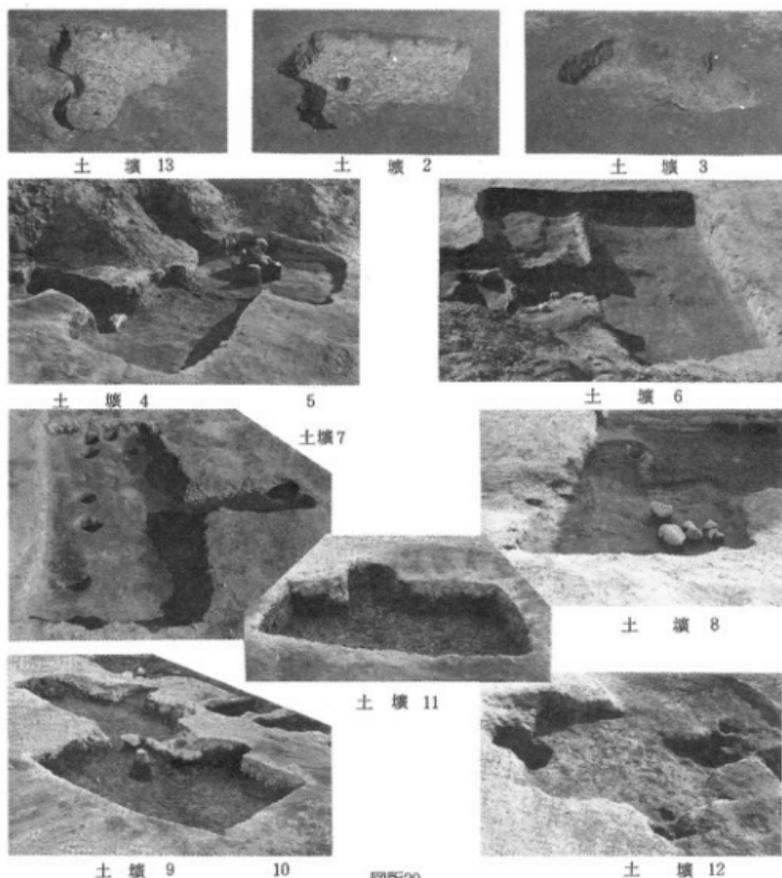


神図30 1号墓墳出土菊皿

図版19 1号墓墳遺構全景および菊皿

6 土壌

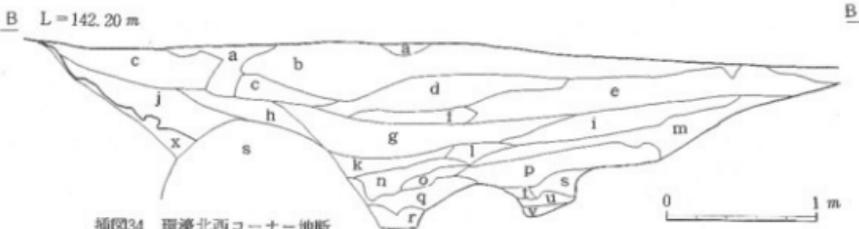
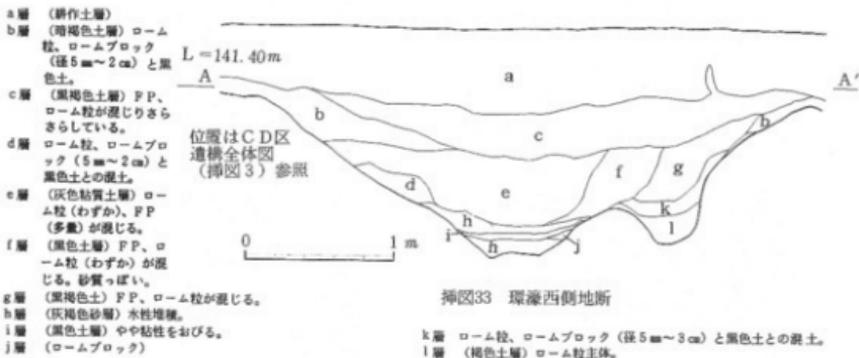
D区の中央部を東西に並ぶように、長方形プランに作り出し状の突出部があった土壌が検出された。突出部が南につくもの8、東につくもの3、変形のもの1である。遺構確認面から遺構中央までの深さは、土壌8の44cmから、土壌10の76cmまでで平均すると56.3cmである。遺物は、流れ込みと見られる縄文土器、石弁の他は、周辺に常滑焼きの破片が散布していたのみである。なお、土壌7に柱穴状ピットが見られることが特異である。



図版20

7 環 濠

C区の大部分を占める方形の環濠は、北側と西側で全面が、南側ではその北辺及び南東コーナーが検出された。環濠で囲まれた部分は、測定できる範囲で、南北34.6m、東西32mの極めて正方形に近い形である。環濠の東辺は、調査地に接して東側の雑木林の中に浅い溝としてその姿を残していると見られる。また南東コーナーはさらに南へ続く濠を想定させる曲り方を示している。濠の幅は、遺構確認面で3.5m前後、深さは1.2m～1.3m前後、掘り方はいわゆる薬研掘りである。また西側と北側の一部で濠の中にさらにしっかりした溝が検出された。遺物は縄文関係の他は、江戸期のもと考えられる陶器破片数片、内耳鍋破片が濠の底及び環濠内の耕作土中から出土している。なお、環濠に囲まれた部分は、耕作による攪乱が著しく、本遺構と同時期と考えられる遺構は西端や、北寄りの一か所、及び南東コーナー寄りの一か所、計二か所に井戸遺構が確認できたのみである。



- a層 (黒灰色土層) 耕作土、サラサラしている。
 b層 (黒色土層) F P (多量)、ローム粒が混じる。
 c層 (黒色土層) F P が混じる。b層より黒味が強い。
 d層 (暗褐色土層) F P、ローム粒、ロームブロックが混じる。
 e層 (暗褐色土層) d層よりローム粒の混入がやや多く明るい。
 f層 (暗褐色土層) c層とd層の混土。
 g層 (黒灰色土層) F P が混じる。鉄分沈着が目立ち、やや粘性をおびる。
 h層 (黒褐色土層) F P、ローム粒が混じる。ややしまっている。
 i層 (黒褐色土層) F P、ローム粒が混じる。砂質。
 j層 (暗褐色土層) ローム粒、ロームブロック (径5mm~3cm) と黒色土の混土。
 k層 (黒色土層) F P、ローム粒が混じる。やや粘性をおびる。
 l層 (黒茶色土層) 鉄分沈着が目立つ。砂質。
 m層 (暗褐色土層) ローム粒と黒色土の混土。中央付近鉄分沈着が目立つ。

- n層 (灰褐色土層) ローム粒、ロームブロック (径5mm) と砂の混土。g層より黒い。
 o層 ロームブロック (径3cm~6cm) を主体とした砂との混土。
 p層 (暗褐色土) ローム粒、ロームブロック (径5mm~2cm) が主体、鉄分沈着が目立つ。
 q層 (灰褐色土) ローム粒、ロームブロックがわずかに混じる。砂質。
 r層 (黒灰色砂質土層)
 s層 (明褐色土層) ローム二次堆積。
 t層 (灰褐色砂質層)
 u層 (黒色砂質層)
 v層 (黒灰色砂質層) ロームブロック (径1cm) が混じりb層より黒味が弱い。
 w層 (淡褐色土層) 水性堆積ローム層。
 x層 ローム層。



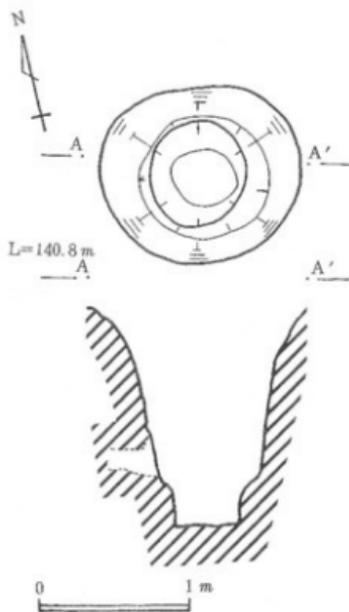
図版21 環濠北西コーナー地断



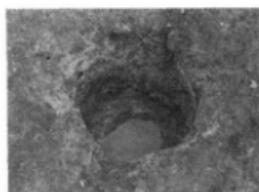
環濠西側地断

8 井戸

C区、D区ともに6ずつ検出された。2つずつ接近しているものを1と考えれば、C・D区全区に適当な間隔で散在している。底に大きな石が入っているか、地下水が湧き出している、底が確かめられない遺構があったが、底が検出された一番深いC区井戸1（挿図35）でも遺構確認面から1.4 m程の深さなのでどの井戸もそう深くはないことが推定できる。調査中に湧出した水はすぐにも使用に耐えるばかりに澄んでいた。遺物は、C区井戸1から、内耳鍋片、磁器茶碗破片、井戸2から砥石1、井戸5から桐で作った座機いざぎの椽状製品（長さ6.5 cmの棒状の両端がとがるように削られ中央部に溝状のえぐり。）井戸6からは砥石1、磁器茶碗破片、D区井戸3から砥石1、内耳鍋片、井戸6からは五輪塔火輪が出土した。



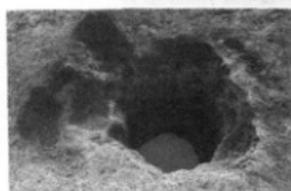
挿図35 C区井戸1



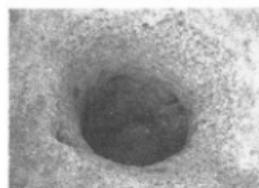
D区
井戸1



D区
井戸3



D区
井戸6



図版22 C区井戸1



C区 井戸1出土



C区 井戸1出土



D区 井戸6出土



C区 井戸6出土 D区 井戸3出土 C区 井戸2出土



C区 井戸5出土

9 溝

A区では、B区と接する位置よりやや東寄りに南北に1条の溝が、幅70cm、深さ25cm前後で検出された。埋め土は、CP、FP、焼土粒が混入する黒褐色土が主体であり、底部近くに砂質が見られるので水が流れたと考えられる。B区では、西端に沿って南端まで、およそ40mの長さで溝の東岸が検出された。現状で幅3m前後、深さ70cm程で、部分的に2条になっている。CP、FP、鉄分凝縮が混じる黒色土が埋め土の主体であり底部に砂質の堆積が見られ、これも水が流れたと考えられる。B区中央部の溝は浅く、採石ビットで終わっているので大雨の際の自然の流水の跡と思われる。C区では北東部に幅60cm前後で、南北に15m程の溝が1条、D区では、北辺に沿って幅1.7m前後60cm前後の東西に延びる溝4が特に明確な姿を呈し、それ以外の7条の溝は、幅が狭く浅い。溝4はFPと若干のローム粒を含む黒色土で大方が埋められ底の部分の厚さ20cm程の間は水性堆積による砂質となっている。溝4の途中から西南に延び、ほぼ35mで終わる溝5は、溝4を切って作られ、埋め土にB軽石とあずき色の灰層を含む。溝6、7は共にFP、ローム粒を含む砂質の黒褐色土で埋められ、南北に延びて溝の5を切っている。溝8は、土壌6、8の埋め土を切って作られた様相を示している。溝9はD区中央部やや北寄りを東西に延び、FPを含む黒色土が埋めている。溝11は、D区東南隅をほぼ南北に延び、多量のFPと若干のローム粒を含む黒色土が埋めている。

10 ビット群

ビットが集中して検出された地点は4か所あった。検出順にD区中央部東寄りをビット群Ⅰ、C区北西部をビット群Ⅱ、C区南西隅をビット群Ⅲ、D区東南部をビット群Ⅳとした。ビット群Ⅰは墓壇Ⅰに接して西側に柱穴状のビットが40余と南側に直径1.2m前後、深さ30~40cmの円形ビット4である。柱穴状のビットのいくつかからは、石、志野焼の皿破片、美野焼の天目茶碗破片等が出土した。円形ビットのうち墓壇Ⅰに接するビットからは江戸中期と考えられる陶器破片1が出土したのみで、どのビットにもわずかに炭化物の混じる粒子の細かい黒色土が主に堆積していた。ビット群Ⅱは、柱穴状ビットと不定形ビットが混じっている。柱穴状ビットは、1間四方の掘立柱遺構が2棟分重なっていると見られる部分を持つ。ビットⅢは、基本的には直径0.7~1.2m、深さ15~25cmの円形ビット9から成っている。出土遺物は常滑の甕の破片1個のみであり、埋め土はFPとローム粒を含む砂質の黒色土ないしは黒褐色土が主である。ビット群Ⅳは柱穴状ビットと直径65~120cm、深さ25cmの円形ビットから成っている。埋め土はFPと若干のローム粒を含む黒色土が主体である。その他のビットでは、D区南端のビット群Ⅳの西側に、長さ4m、幅1m前後、深さ50cm前後で長軸の走向N-16°-Eの長形ビット1とそれに類するビットの1部が検出された。内部に柱穴状のビット5、部分的に床面からの深さ10cm程の落ち込みがある。埋め土の主なものは、ローム粒、ロームブロック(径0.5~2cm)FP、炭化物を含む暗褐色土。

11 その他の遺構

A区では、耕作土を排除した段階でCP、FPが多量に混じる黒色土の範囲を確認し土師1号住居としてその黒色土を排除していった。途中角閃石安山岩製の紡錘車1が検出され、部分的に焼土の混入も見られた。しかしシルト質ローム漸移層の部分になっても壁は判明せず、検出されたビットも位置的に柱穴とは認め難いものであった。床面にあたる部分では片岩製の石弁1が出土したの

みだった。A区西側南寄りでもC P、F Pの多量に混じる黒色土の範囲があり土師4号住居として黒色土を排除したが、住居の北壁にあたる部分以外は判然とせず、土師、須恵の小破片が数個床面より10cm前後高い位置で検出されたに過ぎない。C区東端で環濠の北側では、北壁が3.1m、東壁走行が磁北と一致する住居が北側3分の1程残った状態で検出された。床面はしっかりし、北壁から80cm、東西のほぼ中央に、一部をかま掘で失った炉の浅い落ち込みに炭化物、焼土が堆積していた。遺物は流れ込んだ縄文土器破片の他は柳目のある土器破片1が検出された。ここを土師5号住居とした。C区中央部北寄りの段下に、北辺3m、東辺4m、走向N-22°-W、確認面から40cmの落ち込みを持つしっかりした壁と床、及び、後世の長型ビットによって切られたが(1石が底部、3石が囲い部として残る。)を持つや、ゆがんだ長方形の住居が検出された。遺物は検出されなかった。これを縄文7号住居とした。C区北東部の耕作による攪乱の著しい部分で古墳時代中期の甕、埴、壺のそれぞれの1部と焼土が検出された。なおC・D区北側の段状に高くなる際には溝があり、C区の段差の大きい部分では広く深く、D区の段差の少ない部分では細く浅い傾向があり、内部を埋める土は、浮石質をほとんど含まず、ローム粒、ロームブロックの混じる暗褐色土層が主体となる。

12 まとめ

昭和57年度の調査では以下のことが確かめられた。

○A・B区では、北東部に奈良時代前半(1軒)平安時代前半(1軒)の堅穴住居が検出された他縄文前期諸儀C式土器破片の散布、江戸時代磁器破片の散布が見られた。

○C・D区では、北辺寄りに縄文土器の集中が見られたが、縄文土器について、前期前葉と中～後期初頭と2時期に限定され、他の時期を全く含んでいない。第I群土器は関山式土器を抜かたが量的には少なく1、5号住居から検出されている。胎土には繊維を含み、0段多条の縄文原体を用い、コンパス文、羽状縄文や突起で構成される文様を有する。第II群は加曾利E式後半、第III群は称名寺式、第IV群は堀之内I式をまとめた。第II群はA類である微隆起帯区画の文様が主体をなしており、1号埋設土器に見られる微隆起帯とJ字文、刺突といった加曾利E式の中でも極めて新しい様相を呈するものも存在する。II群からIV群までの土器はIII群を巡って取沙汰が多い。これらの土器群は混在した状態で出土しており、型式毎にまとまった出土は見られなかった。これらの土器群を住居址毎に見ると、特に1、6号住居はII群～IV群の各類とも検出されているため、縄文中期末葉から後期初頭といった時間幅の中に位置づけられ、5号住、JP2、JP3も同様に考えられる。しかし3号住居は出土遺物が少ない事と相俟って加曾利E式土器の終末のものしか検出されていない事をつけ加えておきたい。

○C区南環濠内の堅穴住居は平安時代前半の土師器を出土しているが須恵器は伴出していない。

○C区環濠、C・D区に検出された井戸は、流れ込んだ遺物から江戸期にその機能を果たしたと考えられる。土壌、ビット群の中の直径1m前後のビットは、周辺に五輪塔断片を出土することも含め、墓塚として妥当と考えられるが溝を含め性格、時期は判然としない。



B区 全 景



A区 全 景



A区 出土



環 濠 南西コーナー



環 濠 北西コーナー



D区 ビット群Iでの発掘風景



環濠北辺及びC区遠景



D区 北 側



D区 西 側

整理作業員

柴崎まさ子	加部二生	栗岡エミ子	岩木操	立川正子	大木道子
亀井弘美	下山岑子	城田和泉	住谷静子	富樫則子	住谷文彦
小沢いくよ	高島あや子	高島康	武井美枝子	星野久美子	村上孝子
八木玲子					

発掘作業員

佐藤真寿雄	下山良雄	星野辰雄	天沼福太郎	細谷貞子	細谷ふさ子
中島幸重郎	登丸たけ	中島つる	角田もと江	大沢好幸	鈴木孝子
平林チヨ子	五十嵐くま	小林初子	宮内加代子	長岡武八	奈良ハル子
荻原淳子	古松英太郎	横堀ます	大谷良助	柴崎香代子	井上真由美

(順不同、他、多数の方々に御協力いただきました。)



小 神 明 遺 跡 群

昭和58年3月31日 印刷

昭和58年3月31日 発行

発行 前橋市教育委員会
前橋市大手町二丁目12番1号

印刷 有限会社 原田印刷所
前橋市大手町三丁目6番10号

